

抜きゲーみたいな島に住んでる後輩を攻略するにはどうすりゃいい
ですか？

米五郎左系アイドル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぬきたし2終了後の淳之介視点スス子√ 1, 2のネタバレ少し含まれます。

本編にスス子のスススの一つもないのでショックで書いてます。基本ぬきたしゲーム本編と似たような感覚で読める文章心掛けています。

作者が亀頭的非識字でございます故、遅筆乱文ご容赦くださいませ。

R-18描写までは少し遠いですがよしなに。

目次

その1	1
その2	9
その3	16
その4	24
その5	33
その6	41
その7	52
その8	61
その9	72
その10	83
その11	90

その1

『ばーなばーいせーんっ!』

『なんだ、お前か…』

……少し前までは考えてもいなかった。

『お前とはなんですかお前とはあ!……あーあ、最近めつきり暇になっちゃったつすね!』

……いわゆる並行世界に移動するまでは考えられなかった日常で。

『ああ、そうだな。だが、望んで以前までの忙しなさに戻ろうとは思わないが。スス子もそう思うだろう?』

……けれども、今のこの日常こそが自分たちが追い求めていた平和であり希望の日々で。

『まあ、戻りたいかって言われたら絶対イヤっすね…。SSの仕事に反交尾勢力の対処について、ハードすぎっすよ。』

……だからこそ、決して失ってはならない。これから襲い来るであろう苦難から守らなければならぬのだ——

『それと、スス子じゃなくて伊波っす!って何回言えば呼んでくれるんっすか、——淳之介センパイ!』

橘淳之介が作り上げた日常を。

……

……

……

「——……可愛すぎかッ?」

何の変哲もない朝だ。

小鳥のさえずりと、外から聞こえてくる喘ぎ声をもう違和感にも思わなくなってしまうた。慣れとは恐ろしい。

まだ寝惚けている頭で、起きざまに発した言葉の真意を探る。

すごく…もどかしい夢を見ていた気がする。……するのだが。

(どんな夢を見ていたのか。さっぱり忘れた。)

可愛すぎ!となるほど悶える夢であればもう少し記憶に残っていてもいいのでは、とも思ったが所詮は夢なので思い出せないなら仕方ない。

思い出せないことに延々と悩んでも仕方がないので、リビングへと降りる。

「おはよう、文乃」

「おはようございます、淳之介さん。今日は日差しが大変強く、昨日と比べて暑くなるかと。」

「この時季には珍しいな。急な温度の変化で文乃も体調崩さないようにな。」

「存じ上げております。お気遣いいただきありがとうございます。」

あの世界線オナホールの一件からしばらく経って。

B世界の“性帝”であった橘淳之介から受けた朝食シヨックが未だに後を引きずっているのか、今日も今日とて朝食は豪勢だ。いやむしろ豪勢過ぎる。

美岬がいると心もとないが、美岬がいないと完食に不安が残るそんな塩梅だ。

「ふぁーあ…あーねみー。兄ーきいてー、妹一人で起きたよー。いやもうこれはノーベルあさちゃん賞受賞するレベルの快挙だわ兄あさちゃんのこと褒めて称えてついでにご飯をアーンして」

丁度あさちゃんを起こしに行こうとした所で、珍しくひとりで起きてくる。

ノーベルあさちゃん賞がどんな賞かはわからないが、確かに快挙である。

「おおよしよしえらいぞあさちゃん。はい授賞式だあーん。」

「あーんムチャウマムハム」

椅子に座ったあさちゃんに、あーんしてあげる。すると文乃もこちらに顔を向けて

「じゅ、淳之介さん、文乃にも何卒…」

「おおいぞ、いつもありがとうのあーん」

「あ、あーんでございます。むべむべむへむへ」

こうしてあーんし、あーんし、橘家の朝食は何事もなくすぎていくのであった。ちなみに交互にあーんすることに手一杯で、誰からもあーんしてもらえなかった。ぐすん。

しかし、遅寝の名人であるあさちゃんが早く起きてくると朝の時間が大分余ってしまった。

「…テレビでもつけるか」

適当にSHKをつけると、一人の中年男性とマスコットがなにやら会話しているようだった。

『ズコズコさあん 今日は何を作るんだい?』

『今日はねパコリ。子供を作っていいこうと思うんだ。』

『えゝゝゝ… 僕達二人ともオスだから子供なんてできっこないよ』

『そういうと思ってねパコリ。今日は用意してきたんだよ。じゃーん! 出産適齢期のいい感じの女!』

『いやったあー! じゃあ僕からいくぞー! 孕めオラ!』

『トンでくアクメアン! パコってイクイクー!』

………パコってアソぼというタイトルの番組らしい。

「いや、子供作るっていう目的でやってるんだったら、遊びの範疇を超えるのでは? 思いつきり孕めオラって言ってるし」

あさちゃんから鋭いツツコミが飛んでいったが、悲しいことに相手は画面の向こう。責任を取る気でやっているのかは誰にもわからないのであった。

「パコってあそぼですね! 久々に見ました! 私この番組の前にやっていたデキるかな好きだったんですよ! 最終話でちんぼさんが射精した時は子供ながらに泣いちゃって…」

射精しなければデキるも何もないのでは?」

「というか、いつの間に入ってきたんだ、美岬。」

「いえ、なにやらおいしそうな匂いだなーと思っただらいつの間にかこの食卓までフラフラと来てしまいました。」

「はっはっは。美岬は食いしん坊だなあ。そのシャケの切り身は俺がとっておいてるやつだから絶対食べるなよ?」

今日も今日とて、平和な島の平和な食卓は過ぎていくのであった。美岬が来たことでオカズの取り合いには発展したが。シャケ返せ。

そんなこんなでやってきた、平和な授業の合間のこれまた平和な昼休み。A世界でSSに色々と迷惑をかけてしまったという所から始まったランチタイム。

今日は奈々瀬の手作りお弁当を生徒会室まで持ってきてそのまま食べる、という日なのだ。

生徒会室の前で、たまたまシユウ君と鉢合った。

「やあ、淳之介。今日も会長達とランチかい?」

「おおシユウ君!奇遇だな!よかつたらシユウ君も一緒にランチといかないか?」

「会長達が許可を出してくれるのであれば、是非とも一緒に一緒にいたいね。僕のデータも突然湧いて出た友人との会食のチャンスに期待を膨らませているよ」

データが勝手に膨らむのはどうなのだろうか。容量的な意味で。

「失礼します。中村です。そこで淳之介と鉢合わせまして、もしよろしければランチを一緒に一緒にしてもよろしいでしょうか?」

シユウ君と共に生徒会室に入室すると、そこにはSSビッグスリーだけでなく、スス子の姿もあった。

「あら中村さん?構いませんよ?食事は人数が多いほうが楽しいですもの。いいでしょう?郁子、礼?」

「おっ、いいですねえ。寮でのパーティーみたいでワクワクしてきた

「伊波もどうだ？」

皆でランチと聞いてテンションが上がっている礼先輩に誘われたスズ子。自分に質問が飛んできた時からそれはもういい笑顔で

「いいんっすか!? やったー! パーティーだー!」

とはしやぎはじめるのであった。

「礼ちゃんも伊波ちゃんもすごいはいはいでるけど、あくまで昼休みだからいつものしゅわしゅわ麦ジュースはなしだよー。わかってるー?」

「はいー!」

郁子が諫め、二人が元気よく返事を返す。あいも変わらず、仲がよさそうなSSであった。

それぞれがお弁当を広げ、食事が進んでいく。

桐香の食事の世話をしながら自分の食事もすすめていると、スズ子が隣に移動してきた。

「普段ばなせんぱいとこうすてお昼食べることないんで、結構新鮮っすねー。」

「確かに放課後に話すことはあっても、お昼時限定ってなるとな。桐香達とももう一緒に食べ始めてそこそこ経つし、シウウ君とは水引ちゃん達と3人で食べる時に一緒だからそうでもないが」

NLNSの皆やSSに水引ちゃん達の3グループをローテーションで行き来しているが、普段桐香達偉い人グループと食事をしないスズ子とはあまり機会がなかった。

「スズ子君が会長達に混じって食事を取るとなると、他のメンバーもいるパーティーならいざしれずどうしても普段の場面だと緊張してしまうのも無理のないことだろう。」

うんうんと俺とスズ子がシウウ君に首肯する。その片手間に桐香にご飯をあんさせながらふと気づいたことがあった。

(今日あんさせてばかりで、一回もあんしてもらえていないのは?)

気づいてしまった。

「誰か俺にもあーんしてくれ！」

叫んでしまった。

「何言っただこの先輩……」

スス子に怪訝な目で見られるも、そんなことお構いなしだ。

「今朝からあさちゃんと言乃にあーんしてばっかりで、一回もあーんしてもらえていない。そして今、桐香にあーんをしているが、誰からもあーんを返してもらえていない。」

これはアーンスールの法則に反している！そうだよな、シユウ君？」

「確かに、あーんに対して一定回数なあーんでお返ししてあげるのは、かのフランスの学者アンドレ・マリ・アーンスールの発見した法則によつて決められていることだ。これが遵守されないと、あーんをするだけの人間に酷く負担がかかる……ましてや今日あーんした人数が一人ならともかく三人にもなると……」

シユウ君はそういつて、奈々瀬の手作り弁当からオカズを一つ摘まんでこちらに寄越してくる。

——まさか!?

「淳之介にばかり負担を強いるのはよくないと、僕のデータも言っている。さあ淳之介、あーんだ。」

「シユウ君!?!なんとよい友人をもつたものだ。あーん。」

「いや、なんすかアーンスールの法則つて。そして何を急に始めてるんだこの先輩方……」

またしてもスス子からの冷静なツツコミが入るが、そんなものこの友情の前には無粋なものよ。

「ダーリンと中村君のやりとりにはソソるものがあるけど……いいなあイクもダーリンにあーんするのー!」

「何!?!それなら私も淳之介にあーんするからな!」

とまあ、郁子や礼先輩もあーんしてきて。

「あらまあ楽しそうね礼、郁子？私もセンパイにあーんしてさしあげたいので——あーんもぐもぐ」

桐香にあーんをさせると何が起こるかわからないので、勝手に動き出される前に追加のあーんで動きを封じる。

すると、食事をしているメンバーであーんをしてもいないし、されてもいない人は一人になってしまう。

「え、コレあたしもばなはいせんにあーんしてあげなきゃいけない流れっすか？」

シユウ君と俺、無言の頷き。ビッグスリーの面々も言葉に出さないものの、なにやらスス子を見る目が楽しそうである。

「うわ、完全に流れから出遅れた…全員が見てる前でやるのって結構キツイものがあるんっすけど…」

全員の視線がスス子に向く中、意を決したスス子は主菜であるお肉を箸で摘まみあげる。

そのままスムーズにあーんの流れかとも思われたが、俺と視線を合わせないようにしているのか動きが緩慢だ。

いや、目線を合わせないようにしているが、しつかり意識はこちらに向けている——!?

少し目を反らしつつ、けれどないがしろに扱っているわけではないよというこのバランス感覚と、照れ臭さから来ているであろうもどかしさ。

「うん」

「いや、いいじゃなくてあーんされる側の人間が口を開けてくれなきゃ、どうしようもないんすけど!？」

中々じれて進まない現状に業を煮やしたスス子が、半ばダチヨウのアレ的に肌に押し付ける位の勢いで肉を突きつけてきたのであーんはそこで終わってしまったが。

……あーんを恥ずかしながらにするスス子に。

そのいつもの快活さとは違った儂げな雰囲気な表情に。

ものすごくときめいていた。

後、お弁当として作られてから時間が経っているので、お肉は熱く
なかった。

リアクション芸殺しだ。

その2

『スス子！待たせてしまつてすまない！』

『もー、本当つすよ！。どんだけ待ったかと思つてるんすか！なんてあ
たすも今来たところなんでスけどね。』

『なに!?それでは謝り損なのではないか?』

『いーんつすよ、こういうデートでは男に少し罪悪感を抱かせつつ、壺
をドーンつと買わせるもんなんつす。』

『手の内を自分から明かすのか…。まあいい、毒婦を食らわば蜜壺ま
でとも言ふ。では、いくか——伊波。』

『——っす。了解しました!…淳之介センパイ!』

『では、上官命令だ。手を出せ!』

『らじやつす!』

伊波と呼ばれた時の、驚いたようなそれでいて可愛げのある笑顔。
手を出せと言われたときの、快活な笑顔。

そして、手を繋いだ時のひまわりのように満面に咲いた笑顔。

どれもこれもが眩く輝いていて、彼女の魅力を表していた。

ああ、この笑顔を見ることができてよかった——

……

……

……

「——……可愛すぎかッ?」

何の変哲もない朝だ。

小鳥のさえずりと、外から聞こえてくる喘ぎ声が耳に心地いい。

まだ寝惚けてはいるものの、今日こそは夢の内容を覚えている。…
いるのだが。

(一体なんだつたんだ、あのメチャ甘空間は…)

昨日は、たまたま居合わせたシユウ君やスス子と食事を一緒にとる
ことになり、不覚にもスス子にときめいてしまったが。

まさかその日の夜に、こんなハレンチな夢を見るとは思つてもいな
かった。

付き合ってから二年は性交渉をしないと、自分に固く誓っていたはずなのに。

付き合い始めるどころか、ちよつと意識したその日の夜に手を繋ぐ夢を見るなんて……！

(いや、待て…もしや昨日見た気がするであらう夢もまさか!?)

もし…もし仮に二日も連続で同じ相手の甘ったるい夢を見て、更に現実でも同じように甘いことを繰り返すだけだなんて。

誇り高き童貞にしてあるまじき、浮付きではないのか？

そうなのであれば…いやそうに違いない。

——筋トレだ。

心を無にして、ただひたすらに筋肉をいじめぬくのだ。

そうすれば、この心の浮付きや、妙に昂ぶった心臓も落ち着かせることができるはず。

………

「よんひやくきゆうじゆうにつ…きゆうじゆうさんつ、きゆうじゆうよんつ」

自らの戒めに筋肉をほどほどに痛めつける。

トレーニングすることで煩惱を退散させ、更には体を引き締める。

やはり筋トレこそ至高。

そんな風に無心で筋トレに励んでいると、アサちゃんが部屋に来た。

「いや、兄は朝っぱらからなんてことしてんだよ。今日平日だぞ？文乃がさあ、音はすれども淳之介さんが全然起きてこないのですって嘆いてるぞ?」

もうそれほどまでに時間が経っていたのか。中々に煩惱が消えてくれないからと少々夢中になりすぎていたようだ。

「なにつ、もうそんな時間か。きゆうじゆうきゆうつ、ごひやくつ…ふう、待たせたな。今行くぞアサちゃん。」

リビングに降りると、文乃が少し拗ねた様な顔で、食事を用意して待っていた。

「…淳之介さんが起きている音は聞こえたのです。ですが、一向に食事をとりに降りてこられないので、先日のように人が変わってしまったのかと…」

「むっ、すまない…そこまでの心配をさせているとは考え付かなかった。ごめんな文乃」

「よいよいでございます。わたし自身で階段を上がって直接確認にもいけない、弱い文乃が悪いのです。」

世界線オナホールの一件があつてから、なるべく文乃に心配はかけまいと気を配ってはいたが、どうやら動揺して自分のことで頭がいっぱいになってしまつていたようだ。

確かに、ある朝妹が平行世界の妹と入れ替わつてしまつて、お前なんて本当の兄じゃない！だなんて言われてしまつてはショックで立ち上がれないかもしれない。

いや、そんな流れはもう既にB世界に俺が移動した時に実際にやっている。

そしてそれは、ものすごく不安で寂しくて傷付いたのだ。まさしく身を引き裂かれるような思いであつた。

それこそSSビッグスリーの三人がいなければ狂つていたのではないか？と思う位には。

そんな不安を解消してあげねば。撫でてあげねばと、俺は一人憤慨した。

「あー、ごめんな文乃よしよしよし文乃は偉い子強い子だ、これから何かあつたらすぐに言え？もうお前は橘家の末の妹なんだからな？よしよしよしよしよし」

「わっわっ、そ…そのように言っただけなのは大変光栄でございですが、頭をそのそんなにナデナデされると、ぬっへっへっへっへ」
文乃の頭をわしゃわしゃと撫でてやると、あのいつもの微妙な笑顔で受け入れてくれた。

その後も、日頃から家事をやってくれている文乃に対する感謝の言葉を送りながらよしよしし続けてやった。

やはり文乃は偉いのだ。この島でたった一人で戦っていた時から

ずっと。

「おーい、最初の妹であるアサちゃんを置いて二人だけの世界に行くのやめてもらっていい？大体文乃も文乃で口では遠慮しといて最初っからニヤケ顔が隠せてないんだけど…？」

こうして、少しずつ家族の絆が深まっていく橘家であった。

……………

ぬきたし

……………

昼休み

「んああっ、ダメっアタシまだっ、アっ♡、ランチパック食べてる、とちゅうだから…そんなにハゲしく腰とめっ、やっ、イっちゃう…！」
「なに？ランチパックだっ？…さっさと精子たくさん集めてマジイキ孕めパンパン祭りに応募でもしてな！孕めオラ！」

真ドスケベ条例が施行されてしばらく経つが、廊下を見ると昼休みでも相変わらず性産的行動に勤しむ生徒は多かった。

そんな中、今日はシユウ君と水引ちゃんの三人で和気藹々と昼食をとっている所だ。

「いつも思っているが、ああいう語感センスってプライベートで黙々と考えていたりするのかな？」

前々から思っただけだ。

孕めオラ等のオーソドックスなセリフから、セミになったり、句を詠んだりよくもまあ語彙が尽きないものだなと。

そこから出てくる当然の疑問ではあるだろう。あれ程多数のネタをいつ考えているのかと。

などと二人に聞いてみたところ、水引ちゃんから驚きの声があがった。

「ええっ？橘くん、孕ませ文句考えたことないの!？」

「孕ませ…なに？」

アレそんな名称がついてたの？

「おいおい淳之介、島の男子なら決めゼリフの一度や二度考えることはあると僕のデータベースにも登録されているぞ？」

「……つと、すまない。君は最近島に越して来たばかりだったな。失念していたよ。」

「ワタシはハメドリくんの中にいたからそうでもないけど、島外から来る人とよくドスケベセックスしてた他のSSのメンバーはより一層ドスケベ語彙力が求められるからねー。」

「ああ、僕のデータにも多数のパターンがインプットされているよ。読み掛けに対してタチ返りで返せてこそ、真の返喘、真のドスケベセックスと言えるからね。」

シウウ君と水引ちゃん、説明してくれる。

確かに島の顔として観光案内に務める人間は、どんなドスケベシチュエーションにも対応できるようにしなければならぬのは当然だ。

「なるほど。それでシウウ君返喘とは？」

「ああ、そこもかい？返喘とは古くは平安時代から続いている行為で、相手の喘ぎに対し、即興で喘ぎを返せる人物が風流とされていたんだ。」

それは現代でも変わらず、素晴らしい返喘が行われると見ている我々も感嘆せざるを得ないよ。」

「そんなにやるのがなかったのか、昔の人間は。」

「でも、橘くん！そんな昔の人間がやることやってたからワタシ達後世の人間がこんなに繁栄したということを忘れないでね？」

「いやー淳之介、これは水引くんに一本取られたな。」

「「やんややんや」」

こうして、いつものように会話をしながら昼食時は過ぎていく…のだが。

あまりNLNSやSSの女性陣には話せない話題があることを思い出し、タイミングを計って切り出した。

「そういえば最近、と言ってもせいぜい数日前後の話なんだが聞いて

くれるか？」

当然、どの事についてかも特定されにくいよう詳細はボカしながらにはなるが。

「ああ、もちろん。」

そう返してくれるシユウ君と、うんうんと頷く水引ちゃんに安心して、話を切り出す。

「夢を見るんだ。同じ女の子で、それも実在する子。その子と俺は夢の中で恐らく恋仲に発展しているようだった。

その夢を見ていると、興奮が収まらなくなってしまいうし、現実でも意識せざるを得なくなってしまうているんだ。どうすればいいだろうか？」

神妙な表情で聞いてくれる二人。

ふとシユウ君が口を開いた。

「まず、前提としてだが催眠音声などの副次的な誘導があった上でその夢を見ている…という訳ではないんだろう？」

「ああ。最近は耳かきなどのソフトな癒し音声を視聴している。」

「んーと、橘くんとその女の子って、恋仲になるかも知れないほど凄く親密だったりするのかな？」

「いいや。ある程度気心は知れている、と俺は勝手に思っているが恋仲という程ではないし、そもそも向こうがどう思っているかも分からない。」

茶化さずに真剣に相談に乗ってくれている二人が、今は本当にありがたい。

二人してうんうん唸った後に、またもや先にシユウ君が発言する。

「ここ最近という話であれば、手っ取り早いのが『これは夢だ！』と割り切ってしまうことだろう。半月、一ヶ月と続くようであれば話は違うがね。」

「なるほど。実際そこまで長く続いていることでもないし、一過性のモノと割り切るのもありだな。」

シユウ君の言うとおり、何回か夢を見て、あーんされたりして、急

激に意識してしまっているだけで。

少し経ったら、ああそんな事もあったな程度の認識まで落ちていることの方が高いのだ。

いいアドバイスをもらったな。と、納得していると水引ちゃんがふとつぶやいた。

「でも逆に、この後もずっと夢でも現実でも意識することが続くのであれば……」

——恋、なのかもしれないね？

恋

確かに、続いたときの事を考えていなかった。

これからしばらくスス子の事を考え続けるようになってしまったら。

それは俺が自分でも気づかないだけで。

——スス子に恋をしている、ということなのだろうか。

「へーつくしよいつすー！」

どこか遠くで、誰かがクシヤミをする音が、聞こえた気がした。

その3 すっぴングデート

——恋とは。

特定の相手のことを好きだと感じ、大切に思ったり、一緒にいたいと思う感情である。

あの後、タブレットを使ってwikipediaで調べた。

水引ちゃんが言っていた恋というものが、鯉や濃い、などの同音語でなければこの意だろう。

この誇り高き童貞である橘淳之介が——恋。

A世界でNLNSと共にドスケベ条例を打倒した時も、B世界でSと共にUSD計画を打ち破ったときも。

彼女達についても決して色恋になびく事がなかった誇り高き童貞である俺が……恋？

「であるからして召し籠むという単語は、召使のような立場の弱い人物を監禁プレイするというドスケベシチュエーションなんです。逆の立場で、目下の者が上の者をドスケベ監禁逆レイプする場合はまた単語が違ってくるので気をつけてください。」

水無瀬先生の古文の授業では、いつも通り程々に退屈になり授業に集中できなかった。

そのせいで、昼休みの会話が頭から離れてくれなかった。

延々と恋とはなんだ若さとはなんだと考えていたが、結局思考は堂々巡りになるばかりであった。

そして、授業の終わりを示すチャイムが鳴る。

「キリもいいのでここまでにしましょう。みんな今日も気をつけて帰るようにね！」

「起立、礼、ありがとうございます。」

先生の言葉を最後に花丸委員長が号令をかける。今日も一日の授業が終わった。

が、授業中からうんうん悩んでいた所為か、クラスメイトが各々帰宅なり性産的行動なりをする中で席を立てずにいる。

まるで、勃起してしまったイチモツを見せまいとする中学生のようだ。

「まあ!?こんな所にまで精子が残ってしましてよ? 専業主夫の癖に、射精がイキ届いてないなんて嘆かわしい!」

「うう…うるせえ! 小姑なんて、子宮を下ろしてコツンと突かせてりやいいんだ! 余計な事に口出さずに腰を突き出せ孕めオラ!」

「ま、まアツ…そ、そんなはげしっ、突き方っ、してもダメなっ、モノはっ、やつダメっ、イックう…!」

小姑と主夫で何やってるんだ、嫁はどうした。

廊下からそんないつもの喧騒が聞こえてきて、ようやく気持ちを整理することができた。

(やはり、この感情が恋である可能性は…薄い!)

意を決して立ち上がる。無論ズボンにテントなど張ってはいない。立ち上がって思い出す。

今日は、妹と俺の二人でご飯を作る日だ。

以前ちゃんこ鍋を失敗なく作ってから、決して早くはないが徐々に徐々に料理の腕を上げてきている。

もちろん複雑な工程を要する食事などは、まだ淳には早いと奈々瀬から忠告はされている。

自分のレベルにあった料理を練習していくことが上達の一步なのである。

料理のためには食材が必要であるが、我が家の冷蔵庫は食料が少なくなっているのを今朝確認済み。

しかし、文乃やアサちゃんはNLNSの皆と出かけるこのことで、一人で食料の買出しに行く予定だ。

と、この後のスケジュールを考えながら校門まで出てくると、この場所では会うには珍しい人物と出会った。

「あつ、ばなせんぱい! こんにちはーっす!」

ただいま絶賛頭を悩ませられ中の那賀伊波ことスス子その人である。

「おう、——伊波！」

「…あ？」

「…あつ」

間違えた。

夢で見てきたシチュエーションに口がつかられて、ぽろっと出てしまった。

いや、違うのだ。そんな名前で呼んで彼氏面してる自分の夢が羨ましいとかではないのだ。

「いや、ちが、これはぼろっと」

呼び間違いを謝罪しようとするも、誇り高き童貞である証——受け答えの際しどろもどろが出てしまう。

そんな俺を見て、ポカンとしていたスス子がいきなりニマーツと悪いことを考えていそうな笑顔になり、

「なーんだ、そういう風と呼ばれたかったなら正直に言ってくれば良かったじゃないっすか。ね、淳之介センパイ？」

「はっ？」

「はっ？」

一瞬理解が遅れた。

そして、二人の間に一瞬沈黙が流れ：

「ぐおおあああああつ！」

あまりのキunksunksunに、心臓に莫大な負荷がかかった。

突然胸を押さえて叫び出した俺を気遣うスス子から：

「えっ、どうしたんすかいきなり叫びだして…体調不良っすか？淳之介センパイ」

「ぐあああああああつ！」

追い討ちが飛んできた。

さらに激しくダメージを受けている所に、法則性を理解したであろうスス子からの…

「淳之介センパイ?」

「うぐあああつ……くつ、いつそ殺せ……!」

ついできの淳之介センパイでさらにダメージは加速した。

アサちゃんもビックリの死体撃ちだ。

「いや殺せつて、アンタが先に下の名前で呼んで来たんだろうがつ。名前で呼んだだけなのに拷問されてるみたいなりアクションは傷付くぞ……そろそろ起き上がってくれないと周りの生徒の目がキツいっすよばなばいせん。」

「はっ!——ああ、すまない、スス子。」

「どうせ呼び間違えたーみたいなヤツなんっすよね? 大体流れは読めるっすよ。」

察しの良いスス子に全面的に同意しておく。

その察しの良さを、大ダメージを受ける前に発揮してもらいたいところではあったが、もう済んだことだ。

「しかし珍しいな。SSの仕事は今日はないのか?」

「ああ、今日はお休みいただいてるんっすよ。それに最近バイトもOKになって、SSと別に色々な所でお仕事してる子も多いっす。」

「では、スス子もバイトか?」

「あたすはちよつと、メインストリートの方まで食料の買出しっすよ。貧乏人は食事も外食で手抜きができないっすからねえ。」

スス子が家庭の事情でSSの特別奨学金を目当てに入隊している、というのは確かB世界で聞いた覚えがある。

性産的行動による特別ボーナスがなくなって久しく、バイト等と掛け持ちをして生計を立てる生徒は決して少なくないと、礼先輩との話にもあった。

しかし、ショッピングか。

「奇遇だな。俺もこれから食料を買いに行くところだ。よければ一緒に行かないか? 荷物持ち位にはなれるだろうし。」

「おー、すっピングデートってやつっすね! ぜひぜひ! って言っても帰ってくるの学生寮なんで荷物持ちまでは頼めないっすよー」

「なら、話し相手だな。」

こうして、二人ですツピングデートとをすることになったのであった。

メインストリートの大型スーパーに行く道中、スス子が新作ゲームの広告を見て驚いた表情になる。

「あつ、風来のシコレンの新作だ。」

「風来の…なんて?」

また、こう聞いたことのあるようなないような名前が出てきた。

「アサチユンソフトが出してる結構息の長いゲームっすよ。挿れる度に膛内のヒダヒダが変わるエロエロークライクマンコが話題になったやつっすね。」

キャッチフレーズは「千回では出し尽くせない膛奥深さ」

「千回出せるのにシコレンなのか。」

「ああ、その中身が変わるマンコの持ち主、主人公のシコレンなんです。だからそれでイカされた相手はシコレン以外ではシコレんってことらしいっす。」

「ええ……親父ギャグじゃん」

スス子がゲームにそこそこ詳しいという事に驚きながらも、目的地のスーパーに到達する。

「今日のメニューは…卵焼きと、後はどうするかな…」

つぶやきながら食料品コーナーを回っていると、隣のスス子が

「ばなさんが自炊するんっすか!?意外っすね」

と、ちよつと失礼な事を言ってきた。

「まあ自炊って言っても初心者同然だがな。自分で満足の行く卵焼きくらい作れるようにはなりたいさ。」

「好きなんすか、卵焼き?」

問いに頷いておくと、スス子はふーんといった様子で割引されているお肉のパックを手にとってきた。

「スス子も料理はできるのか?」

「失礼な!乙女としての嗜みつすよ……やっぱり、食費をうまく浮かそうとすると勝手にスキルがついてきちやうんつすよね」

言い返した時は語気も少し荒かったが、後半になると自嘲気味にスス子は言った。

「チュパちゃんのご飯代もありますし、節約術はその辺の主婦並にはあるかもしれないっすね。」

そう言つて照れ臭く笑う姿に。

普段はズボラというか、身長もあいまって中性的なスス子の、普段見られない部分を見た気がした。

その後も下らない話をしたりしながら、無事に買い物は終了した。

「今日は付き合つてくれてありがとうな。」

「いえいえ、こちらこそっすー。」

すっかり日が暮れた帰り道。

片手で持てる程度の量を買つた俺に対して、スス子は両手一杯になるほどの袋を提げていた。

一度持とうか?と確認はしたが、重いですし途中で別れちやうんで大丈夫つす。との言葉を頂いたのでそれ以上は提案しないようにしている。

「しかし、本当に重そうだな?」

「まあ、この位の荷物程度なら、SS入隊試験の時にやらされていたトレーニングとかの方がスう倍キツかつたつす。」

確かに、裏風俗の情報を探る中でSSの訓練を受ける機会があつたが、それはそれは厳しいものだった……。

二人してかつての厳しい訓練にシンミリしていると、後ろから突然チャリンチャリンと鈴の音が聞こえる。

それが自転車のベルで、今俺達が歩いている所に突っ込んで来そうだと気付いた時には、体が反射的に動いていた。

「スス子、危ないッ!」

「はえっ?」

スス子の腰を空いていた左手で抱き寄せ、間一髪でその横を自転車が通っていく。

バイブ付きの青藍島仕様自転車であった事から、あまりの快感に操縦不能状態にでもなったのかもしれない。

「危なかった、やはり美岬クラスの変態でもなければあの自転車を完璧に乗りこなす事はできないか…」

「——あ、ありがとつす。……えーっと、それで分析するのは構わないんつすけど、その、手は、いつまで、触ってるんつすかね？」

自転車が走り去ってから少しの間呆然と立ち止まっていた俺達であったが、スス子に言われて未だに腰に手を回して強く抱き寄せたままであつたことを思い出す。

慌てて腰から手を離し、今まで以上に距離を取る。

「悪い…って、何だか今日は謝ってばかりな気がするな。」

「気にしないでいいつすよ。今のはアタシもちよつと浮かれて気が抜けてたつす。」

互いに照れ笑いを浮かべ、再び歩き出す。

その後は、橘家へ行く道と学園への別れ道に着くまで、二人の間の言葉はそれまでよりも少なかった。

「じゃあ、また明日以降つす。」

「ああ、またなスス子。」

結局本人の申し出もあり、学校までは送らなくていいとの事だったので、分岐点で解散となった。

一人家路に行く俺の頭の中には、この後料理をどう作ろうなんてことではなく、今さっきの出来事が鮮明に頭に焼きついていた。

スス子の腰の感触。

抱き寄せた時に密着した、やわらかな胸や、ハリのある体。

寮で使っているであろうシャンプーと汗の混じったような爽やかな匂い。

そして、離れる時に見せた、ちよつと拗ねたような照れたような表情。

校門で会った時にやりとりしたすっぴングデート、なんていう茶化しあいがあるに今までの出来事を印象付ける。

これではまるで、本当のデートではないのかと。

家に帰ってからも、どこか上の空で作った卵焼きはちよつと失敗した。

——味が、濃いのだ。

その4 中間射精管理録ハメカワ

『淳之介センパイ?……そろそろ、ムラムラしてきちゃったんじゃないっすか?』

(——ああ、またこの夢か)

『……そうだな。幸いこの辺りは人目につきにくい。が、しかしいいのか?昔の条例とは違うのだぞ?』

『アタシがしたいんっすよ。それに上官命令でパンツ見させた人間がどの口で言ってるんすか。』

(——パンツ見せた、って何の話だおい)

『パンツは知らないが、まあいい。脱げ、伊波。』

『サーっす!……じゃあ、その性帝オチンチンで、準備万端ぬれぬれオマンコ、搔き回しちやっってくださいっす』

(——性帝ってなんなんだ。そして躊躇なく脱ぎ出すな)

『いつからこんなに濡らしてたんだ?今さっき濡らし始めたにしては、随分と滑りがいいな?』

『はっ、ああんっ、……せ、センパイと、デートっ、いつ、シてる時からっ、勝手に濡れてっ、やっ、あっ』

『なに?では、ムラムラしてきたからと言って誘ったのは俺のためではなく、自分のためだったのか?卑しい女だな。孕めオラー!』

(——こんなことになる前にデートもして、そこでも濡れてたのか!?)

(それに)

「——なんで、アタシは、そんなに幸せそうな表情をしているのだ……」

……

……

……

「……可愛すぎかッ？」

何の変哲もない朝だ。

しかし、小鳥のさえずりも、外から聞こえてくる喘ぎ声も、耳には入っているが頭には入ってこない。

興奮しているのだ。

（二つ前の夢では、手を繋ぐ繋がらないとかそういうった可愛らしいデートをしていた筈では？）

夢の中の出来事であるとはいえ、あまりの急展開に思考がついていかない。

しかし、夢の中の痴態に対して、イチモツが応えている。

紛うことなき、朝勃ちだ。

布団の中でしばし、性欲を抑えるためにぼーっとしていると、ふと今朝の夢に違和感を覚えた。

（パンツを見せた……性帝……上官命令……）

それらの出来事は、あるいは関係は全てB世界の橘淳之介とスス子の出来事であり、関係性である。

B世界で大脱膾ゲームが開催されたときに、スス子のパンツでイチモツを一念勃起させる事は確かにあった。

性帝は、スス子をオペレーターにしていた、ということもあった。

（B世界での出来事を、追体験している……とでもいうのか？）

かつて、SSのビッグスリーと共に世界線を越えた際、自分が経験

した覚えのない変な夢を、四人揃って見たこともあった。

その際は、やれ記憶の上書きだとかタイムリミットだとか言われていたことではある。

しかし、今回はどうなのだろうか？

前回の転移は気を失ったかと思えば、急にSSの寮で起床したところから始まった。

以前転移したときとは違い、オナホール達は最新のラインナップ。前回はなかった“ゲルニカ”など最近のモノも確認できる。

そもそも数日前から連続している夢ではあるが、それらの兆候は見られなかった。

世界線移動は、ほぼ間違いなく起こっていないのだ。

……………

ぬきたし

……………

「なるほど、それで先輩はSS代表兼水乃月学園生徒会会長の冷泉院桐香に念のため確認に来たのですね。」

「キミその自己紹介好きねえ」

放課後。生徒会室。

桐香が既に説明しているが、ここがA世界である。という確証を得るために並行世界に行ったことのある人間にコンタクトを取りにきた。

B世界の橘淳之介に起きた出来事を、夢として再度追体験しているのではないか？

という内容を、細かいところをぼかしながら説明した。

具体的には、スス子が一緒に出てきていて、夢の中でデートをしたリススケベスススしているという辺りを伏せている。

「ここがA世界。詳しく言えばNLNSが発足していて、真ドスケベ

条例が施行されている世界であるということは間違いありません。」

「…良かった。ドスケベな条例はいないんだ。」

突飛な事を言い出した俺に対して身構えていた礼先輩が、深く安堵している。

あまりのよろこびのように、どこかからウイスキーを取り出そうとして郁子に止められていた。

「んもーっ、レイちゃんなに生徒会室に高そうなお酒仕込んでんの？ 飲んじやダメツ！一応執務中！ていうかこのお酒ナニ？」

黒いラベルには英語でジョニーだかなんだかが書かれていた。生憎お酒に疎いので、有名かどうかも分からない。

しかし、箱に書いてあるアルコール度数は40%とべらぼうに高い数値を示していた。

「なにこれっ!?アルコール40%!?!こんな飲んだら仕事どころの話じゃなくなっちゃやうじゃん！大体SSの主要なメンバーいつつもお酒飲むとすぐダウンするんだからこういう真面目なトキ位真面目に話そうよッ！」

やんややんやと騒いでいた二人だが、ほどなくして落ち着いて会話に混ざってくる。

「淳之介だけが見ている夢なのかもしれないな。少なくとも私はそのような夢はここ数日見ているぞ。」

「あたしも見てないー。それにしてもダーリンが入れ替わった後の、性帝だったダーリン視点の夢かあ。並行世界から来た自分が、今まで悩んでたこと大体解決してくれてるーなんて実際に目の当たりにしたらどうなるんだろうね？嫉妬したりするのかな？」

とりあえず、一緒に並行世界に行った三人が同じ夢を見ていないことに安心する。

あんな醜態を彼女等に晒すなど、末代までの恥にもなりかねない。

しかし、嫉妬、か。

逆の立場で考えてみよう。

性帝と呼ばれる人間が、ドスケベ条例をそのイチモツで解決していき、なんか人間関係も凄くいい感じになって元の世界に帰っていった。

……複雑な気分だ。

「先輩が見た夢の中で、時系列などが分かる会話は出てきませんか？ たか？ それによって、少し状況が変わるかもしれません。」

「思い出せといわれてもな…」

せいぜいこの夢を見たのは数回程度と、後は丁度生徒会室であーんしてもらった日は夢を見ていたがどんな夢だったかさっぱり…忘れて…

「思い出した！」

「初めて青藍島に来る初物なみに思い射精すの早かったねダーリン。」

一番最初に見た夢は起きがけには忘れてしまっていたが、再度意識することとどんな会話をしていたかまで鮮明に思い出すことができた。

あーんのやり取りをした日の夢の中で

「暇になっちゃった。SSと反交尾勢力でハードだった。そんな会話をしていた。」

そうやり取りをしていたことを桐香に伝えた。

「なるほど。反交尾勢力とはおそらくトリ公。それが暇になったということであればやはり一連の事件が終わった後の出来事を夢として体感しているのでしょうかね。」

「というか淳之介。その夢の登場人物が私達でないなら、その本人に聞いた方が早いんじゃないか？ 最近変な夢を見てないか？ って」

状況を整理してくれる桐香と、アドバイスを送ってくれる礼先輩。

夢に出てきた相手、つまりスス子、に聞いてみたほうが早いというのは確かに正論だ。

しかし、本当に聞けるだろうか。

（最近俺とデートしたり、ドスケベセックスする夢をお前も見えていないか？ なんて普通質問できない…！）

その後の話し合いで、ただちに影響はなさそうとの結論に至り、職務に戻るSSメンバーを尻目に退散することにした。

「ごめんねーダーリン…あんまり力になれなくて」

「また、進展や万一の不調がありましたら気兼ねなく連絡してくださいね?」

たかだか妙な夢を見ているだけの自分を心配してくれる友人が、こうもいてくれることに感謝して生徒会室を後にした。

……………

「おーい、淳之介!」

NLNSの秘密基地へと向かおうとしていた俺を、ここ最近聞きなじんだ声が呼び止める。

軽く返事をして振り向くと、シユウ君がこちらに駆け寄ってきた。

「今から帰りかい?」

「ああ、そんなところだ。」

「なら少し話していいこうではないか。オススメの作品があるんだ。昨日発売された新作だが中々に評判が高くてね、もし知っているのであればいいんだが。」

「いや…昨日の発売作品でこれといって目をつけているモノはなかったはずだが…」

「そうかそうか、それであれば僕のデータが役に立つだろう。タイトルは…」

——中間射精管理録ハメカワ さ。」

中間…射精管理…?

「聞いたことがない…どんな作品なんだシユウ君?」

タイトルだけで好奇心を駆り立てる作品はここしばらく出会えていなかったからか、自然とテンションもあがっていく。

「射精管理作品ではあるが、ただの管理と侮るなかれだ淳之介。」

管理してくれるナビゲーターであるハメカワさんは、お漏らしなど

許さないと厳格に厳密に射精を管理させたいビュウビュウ 謬 謬会長と、自慰をしていく中で気持ちよくなった時に我慢せず欲望のままに射精をした
い我々ユーザー側の板ばさみとなってしまう苦悩していく作品な
さ。

それこそが中間管理職の世知辛さ。こちらの多少のお漏らしもお
目こぼししてくれるその優しさが仇になり、やがて謬 謬会長の逆鱗に
触れてしまう事になってしまうのさ……

そこで我々が痺れを切らして直接管理しに来る謬 謬会長の厳しい
射精管理を乗り越えることで、ハメカワさんに向けられた疑いを払拭
しようと奮闘する、というM向けとはまた違った達成感のある吐精を
迎えることができるといった作品なのだよー」

聞いているだけでも面白そうだ。射精管理とは基本的に出したい
けど出させてくれないをコンセプトにしているものが多い。

しかし、ヒロインであるハメカワが甘めな許可を出し親近感を抱か
せたところで、本番のハードな管理を行わせるということなのだろ
う。

ハードな管理は使用者によつては拒否感を抱きやすいが、ハメカワ
を謬 謬会長から助けたいとの一心で、激しい行為を我慢させる苦痛を
和らげる……といった算段だろうか。

「ありがとうシユウ君。実に好奇心をそそられるあらすじだった。さ
しづめ収集して来たデータの集大成というところか？」

俺達は無言で握手を交し合った。流石戦友。

「うおーいばーなばーいせーん。」

シユウ君と別れ、そろそろNLNSの秘密基地に行こうとしていた
ところに、またもお声がかかる。

スス子だ。

「昨日は本当助かったっす！お礼にススの手作りお弁当を買う権利を
やるっす。」

いやそこは普通にくれないのか。

「お生憎さま、家計がスの車なんっすよ…マケとくんで是非是非っす…ふああ」

SSの任務中であろうに大きなアクビをするスス子。
「なんだ？寝つきが悪いのか？」

「ああ、最近なんていったらいいんすかね変な夢を良く見るんっすよ…」

タイムリーな話題だ。

丁度生徒会室で話題に上がっていた、夢に出てくる登場人物に確認するという目的はただ一言聞けば達成できる。

最近どんな夢を見てるんだ？と。しかし、それは同時に墓穴を掘る行為でもある。

どうしたものかと逡巡していると、スス子の腕にフェラチオウムのチュパちゃんが飛んできて

「じゅぼぼぼぼっ、アサオナツ、ヤリスギツ、じゅるぼぼぼぼっ！」
とネタバレをかました。

「うわあああん、言っちゃダメっすよチュパちゃん！」

「えっ…スス子お前ドスケベセックスのしなさすぎで後遺症か？」

「違うんっすよ！それは…その…見た夢がススケベというか生生すう夢だったので、つい起き抜けにスカっとしちゃっただけなんっす！」

好機は今だ。チュパちゃんが見出した活路から、なんとしても突破する。

「なんだ、超イケメンでチンポがデカイ先輩でも出てきたのか？」

「いやー…上官命令で後輩のパンツを無理やり見やがった最低のパワハラインポ野郎が出てきたっす」

「ぱ、パワハラじゃないしインポでもないわ！あの時は適した人材がスス子しか居なかったから…ハッ！」

どうやら間抜けは見つかったようであった。

「やっぱり橘先輩何か知ってらっしゃいますよね？確か、並行世界に

行ってきたっておっしやてましたものね？どうりで橘さんが上官なわけだ。他にも何か知ってるんでしよう？」

「どうしたスス子!?言葉使いが変だぞ!?」

「どーしたも、こーしたもないんっすよ！最近変な夢ばっか見てムラムラして困ってるつてのに、原因が身近にいるんだって!?そんなのワケを聞くのは当然っす！」

その後やんややんや言い合っつて分かったことは。

スス子も、ここ数日俺とイチャコラしている夢を見ていて。

その原因が知りたいし、中身がモヤモヤする夢ばかりで悩んでいて。

もしかしたらと、同じ夢を見ているかも知れない(実際見ていた)俺が来たからカマかけたら見事に引っかかたとの事らしい。

「ああもう！詳しい話を聞きたいのは山々なんすけど、いい加減巡回に戻らないときよーかん殿に怒られちゃうっす…」

バナさん週末空いてますよね？空けてください。言い触らすぞ？ススのバイト先の喫茶店があるんで、続きはそこでっす！」

一方的に約束を取り付けて、スス子は巡回へと戻っていった。

週末に、後輩と、喫茶店。

今まで見てきた夢のせいかな、デートを意識してしまうのは果たして俺だけなのだろうか。

——週末まで数日あるし、帰ったら中間射精管理録ハメカワ買ってみよう…

その5 ブレンド・スス

『んちゅっ、むっ、ぷはあっ！……ばなばいせんってオチンチン大きいのに、キスは下手っすよね』

『下手じゃないが!?!』

『いや自覚ないんすか？まあ、その、ドスケベスススに比べちゃうとどうしても青藍童貞くささが抜けないというか…』

『童貞ではない、性帝だ』

『まあでも、キスするトキだけはリードできるんで、これもこれで悪くないんすけどね』

『ふっ、ならこれからもしっかりリードしてもらおうじゃないか？スズくん』

『そりゃあアタシは性帝殿のオペレーターっすからね、当然っす!』

いちやこらちゅっちゅ

……

……

……

「……………可愛すぎかッ?」

朝だ。約束をしていた週末だ。

鳥のさえずりも喘ぎ声も耳に入らない。

興奮しているのだ。

しかし、この興奮は夢の中の出来事のみが原因となっているのではない。

昨日から聞いている、連続射精管理音声中間射精管理録ハメカワがその一因ともなっているのだ。

あの後、実際に購入した上実践もした。

ハメカワと最初に聞いた際、一瞬某やる気元気美岬ハメカワが頭をよぎったが、そのハメカワとは何も関係がなかったことに安堵して管理されることにしたので…。

これが中々に変わった作品であった。

オナニーで身勝手な射精を繰り返し、精子を無駄にし続けるクズ集団。

そのクズ集団を更生させる役割を持っているのが、謬謬会長率いる謬謬グループなのである。

『1050 擦り直イキだッ!』

しこ…しこ…

謬謬会長の恐ろしい死刑宣告にも耐え。

『でも知ってるよ…射精は命よりも重いつて。我慢は体に悪いから、出したくなったらこっさり出してもいいんだからね?』

シッコ…シッコ…

ハメカワさんのちよつとしたサービス精神とゆるやかなストロークに屈することもなく耐えていたら、初日分の音声が終わってしまったのだ。

まさかの日をまたいで管理してくるタイプの作品である。

道理で、2日目フォルダの中に『お情け射精しちゃったver』やら『管理時間外に射精しちゃったver』などの複数のファイルがあるわけだ。

つまるところ、溜まっている。

そんな最中見せられたあの夢だ。

紛うことなき、本気勃ちだ。

しかし、ここで無為に自慰行為で発散してしまつては、ハメカワさんにも示しがつかないではないか。

己の煩惱を何とか抑え込み、いざスス子との決戦の地へと向かうのであつた。

………

ぬきたし

………

スス子のバイト先であるという喫茶店に俺はやってきていた。

「おおっ、ばなばいせんおはようっす！つてなんすか？そのダツサイシャツ…」

開口一番失礼な事を言われた。

「ダサいだと!?!お前今このシヤケTシャツのことをダサいと言ったのか!?!」

なんてことだ。スス子にはセンスがないのではないだろうか。こんなにもかっこいいのに。

しかし、スス子の私服姿は初めて見た。

白のブラウスの上から明るめのカーディガンを羽織り。

下はSSのミニスカートと違い、膝程度までの淡い色のスカートに足を包んでいる。

身長を気にしていると公言しているからか、靴はブーツではないがあいにく俺はオシャレに疎いので何といえばいいか分からない。

が、とにかくカワイイ靴なのである。

率直に言えば、映える、というやつなのであろうか。

『女性の服装に関しての気づきがあったら、素直に言っつて褒めてあげなさい』とは奈々瀬先生からの教えである。

ジーっと自分を見る視線に気づいたのか、スス子がわざとらしく髪をクルクルして体もフリフリしていた。

「スス子は…まあ、あれだ。似合っているぞ。普段と印象が全然違っつてお淑やかに見える。」

「普段は淑やかさの欠片もなくてわるいつすね！けっ——でも、そう言っつて褒めてもらえたなら服を繕っつて来た甲斐あつたつす」

そうやって照れくさそうに笑うスス子の顔を、直視することができなかった。

店頭でのやり取りも一段落し、そのまま二人で喫茶店に入店した。

「この店も、ドスケベセックスができない禁乱区なのか?」

「そつすよー。メニューは前と変わってないんで料理にはドスケベ要素がありますけどそのくらいつす」

真ドスケベ条例制定後、ゾーニングしつかりしようよということ
で青藍島内の飲食店はその多くが禁乱区に設定されていた。

「ここもどうやら例外ではないらしく、店内でそういった行為に勤し
む姿は見られなかった。」

「いやらっしい射精ー、ご注文の女の子はおキまりでしょうか?」

挨拶の原型が消えてない?

「じゃあ俺は、この甘口メロメロンスパと義妹のラムネで」

「はいはい、ススはブレンド・ススと水揚げピチピチスーフードスー
プSPAにするっす!」

絶対スだけで選んだでしょうこの子。

「シコシコまりましたー!」

とりあえずメニューを眺めて興味本位で味わったことのなさそう
なモノを頼んでみたが、この店やたらとゲテモノというか素直に味の
想像ができない品目が多い気がする。

このジュポジュポ生乳クリームチンポバナナスパなんかは、情報量
が多すぎて頭がパンクしてしまいそうだ。

「ブレンド・ススってのはスス子が考案した商品だったりするの?」

「そっすよー。酢とー、ソースとー、スピリタスが入ってるっす」

「はっはっは、殺人兵器かな?」

飲ませあいつことか絶対したくない。

「冗談っすよー冗談!本当はストレートティーに、スモモとスイカと
すだちを入れて最後にちよろっとスコッチを混ぜてできたやつっす」

スで縛っているであろうに、まとまっているというかちよつとした
カクテルみたいになっているのは意外である。

「変態お股射精しましたー!ご注文の女の子は以上でお揃いでしょう
か?」

「おっけーっす!」

「カリこすりましたー!ごゆっくり同時イキ」

「スス子もお店ではあんな感じで働いているの?」

「いや、流石にアソコまでおかしくないっすよ、普段通りっす」
届いた料理を食べながら、本題に入っていく。

「えーっと、まずパイセンは会長さん達と一緒に並行世界ってのに飛んでたんっすよね?」

「ああそうだ。ここでは俺は性帝と呼ばれていてSSの中でも力を持っていたようだった」

そして、向こうの世界で起こったことのあらましを説明していった。

モラルが全く備わって居ないSS監査役補佐からの激しいモラハラ。

反交尾勢力トリ公との邂逅。

何故かアーマー化するハメドリくん。

それらをどうにか打ち倒して、並行世界から戻ってきた俺達。

「こうして、B世界と呼んでいる並行世界での事件は幕を閉じたという訳だな」

実に厳しい戦いであつたが、隣に彼女達が居てくれたおかげで乗り越えられた戦いであつた。

「なるほど興味深いっすけど、それとスス達が見てる夢に何の関係があるんすか?」

「これは仮定に過ぎない話だが、俺達が去った後のB世界の橘淳之介の記憶を追体験しているのではないか?という可能性がある」

「追体験ってことは、実際に向こうの世界ではばなぱいせんとススがそういう関係になっちゃってる」と

「そうなるだろう」

B世界の自分が体験してきたであろう事を夢に見たことはあつた。

桐香はそれを記憶の上書きと称していたが。

それと同じようなことが今二人に起こっているのではないか、というのがSSビッグスリーの意見である。

「とはいえB世界の出来事を夢で見ているだけで、記憶の上書きが」

みたいな厄介な事は起こっていないとみていいだろう」

「ふむふむ、ってことはB世界ってところではアタスとパイセンは名前前で呼びあっている」

「そういうことだな」

「デートで手なんか繋いじやったりして」

「そういうことだな」

「パイセンはおちんちんが凄く大きくて」

「……そういうことだな」

「それなのにキスはへたっぴと」

「下手じゃないが!？」

とんだ風評被害だ。俺のキスが下手だなどとは心外である。

そして思い出した。

今朝は、目の前にいる年相応に可憐な少女とちゅっちゅとキスして、ピロートークしていちやいちゃするという夢を見ていたのだ。

恐らく目の前の少女も同じ夢を見ているはずである。

そのようにからかってくるということは、スス子も俺と同じように意識しているのではないか。

そんなことを考えていると、その服の中に隠している素肌が生々しく想像できてしまい。

その飲み物を飲んでいる唇で、キスをされるところを想像してしま
い。

どうしようもなく、興奮してしまう。

(なぜ、前日に射精をして心を落ち着かせてこなかったのだ：橘淳之介ツ……！)

ハメカワさんに不射精の誓いを立ててしまっていたからである。

あるいはお目こぼし射精でもしていれば、ここまでの興奮はしなかったであろうがそれは俺のプライドが許さなかった。

「ふーっ食った食ったっす。まあ話の概要も分かったことですし、ぼちぼちお店出て次行きましょー」

？」

くそ、利き腕さえ無事であれば……。

そんなこんなで人目のつかない路地裏に連れて行かれた俺であった。

「さつさと、ズボン脱いでサクッと処理するっすよ！まだ今日やりた
いことはたくさんあるんすから！」

あれよあれよとズボンを脱がされていき、以前まではコンプレックスであった大きなイチモツが姿を表す。

この状況になってしまつては、もはや射精は免れないだろう。

ハメカワさんごめん。不射精の誓い破ってしまうかもしれない……。

その6 ♥ ファック・トウ・ザ・フューチャー

ズボンを脱がされた勢いそのままパンツもそのまま脱がされる。

朝の興奮もそのままの男根が空気に晒され、思わず顔を近づけていたスス子もうわつと距離をとった。

「やっぱり、夢で見たおちんちんより目の前の実物の方がおつきく感じるっす」

そういいながら優しく陰部を撫でるスス子。

キュツと握るでもないその強さにもどかしさを感じる。

B世界でイチモツを見られることに対するコンプレックスは克服したが、やはりそれと間近でマジマジとモノを見られるというのは別問題で恥ずかしい。

「うっわぁー、まだ大きくなるんっすね。コレ」

ツンツンと触られるその刺激に、余計に興奮をそそられ更に硬く太くなっていくイチモツ。

「やめろ…俺は誇り高き童貞！こんな誘惑などには屈しない！」

「誇り高き童貞ってよく言ってるっすけどー、ススのお・ク・チで又いてあげる分には童貞失わないっすよ？」

そう言いながら、手で優しく男根を扱かれる。

スリスリ、スリスリと自分で致す感触との違いに身悶える。

手で擦られながら尚も必死に抵抗を続ける俺をよそに、スス子はいきりたった男根をえいっと一息に口に含んだ。

ぬるっとした感覚が男根を這い回って、背筋がぞくぞくしてくる。

「はむっ…んじゅるっ。いやひややさひゆがに、おおひい…じゅるるっ」

子供が新しいオモチャを与えられたときのように。

舌で男根の隅から隅まで、それこそ血管の一本一本、シワのひとつひとつを感じるかのように形を探っていく。

まるで、舌でこの肉棒の形を覚えてしまおうと言わんばかりにネットリと舌を這わせて来る。

それほど強い刺激を与えられていないはずなのに、自然と腰が引け

てしまう。

「スス子…おまえ、フェラ、うま…っ！」

「そりゃあ、チュパちゃんにフェラ音覚えさせたのは、ナニを隠そうこのススっすからね！んっちゅ、れろ、ちゅぽ」

八分ほどの甘勃ちであったイチモツも、全体を探るような舌遣いに翻弄され完全体と化した。

それを見計らったように、舌の動きが加速していく。

「むじゅっ、れろっ……どすか、ぱなぱいへんきもひいいっすか？」

ざらざらとした舌が亀頭をなめ回し、そのままカリに沿って口の奥まで男根を導いていく。

時折甘噛みを交えてくるので、そのたびに腰が跳ねる。

柔らかな唇の感触が、根元に伝わってくる。

「ぬじゅるっ、ぷちゅっ……むちゅっ」

今まで幾度となく、フェラの感触が味わえるというオナホールを試したりもしたが。

まるで違う。

「じゅるるぼっ、ぬちゅっ……ぷはあっ」

ゾワゾワとイチモツを舐め上げてくる舌。

とめどなく分泌してはイチモツに触れ、そして嚥下されていく唾液。

呼吸のたびに蠢動し、優しくイチモツを締め付けてくる口内。

気持ちがいい。

徐々に、徐々に、先端を啜えたまま前後に動かしていくスス子の動きが、速くなっていく。

「そろそろ、お口に疲れが出てきたのでサクッと射精しちゃってほしいっす」

「んぼっ、じゅぞっ、んんっ！じゅずるるるぞっ、じゅずずっ、じゅぞっ、にちやっ」

最初に舌で味わったので十分と言わんばかりに。

焦らそうとか、味わおうとか、そういった考えのない。

下品な音が出ようとも関係ないといわんばかりの、一切容赦のない、本気のフェラチオが始まった。

「じゅぞぞつ、じゅぶつ、んじゅつ、ずぞぞつ」

根元から思い切り吸い上げられ、その柔らかな唇が窄まっていく感覚がイチモツを襲う。

急激に爆発しそうなほどの射精感が混み上げてきた。

「ダメだ、スス子…もう…射精するっ！」

チンポが極上の粘膜に包み込まれ、快感の波が押し寄せてくる。

反射的にスス子の頭を抑えつけ、その口内の感覚をより深く味わおうとしてしまう。

視界が白く暗転する。

昨日から寸止めされていた分の性欲が勢い良く飛び出していく。

「ぬぐつ、んむむつ。んくつ、ごきゅつ、ごくつ、…ぷはあっ！」

その滝のようにも感じられた射精を、スス子は肉棒を頬張ったまま受け止めきり、そのまま口内に無遠慮に出された精液を嚙下していた。

「もお、いきなり頭抑えたらダメなんっすよー？それとも、頭を抑えなくなつちやうほどススのおフェラが気持ちよかつたんすか？」

「ハア…ハア…、正直に言っつてしまえば…気持ちよかつた」

「へへっ、やりーっす！今まで練習した甲斐あつたっす」

頭を抑えるという場合によってはえづきかねない突然の暴挙にも、スス子特に怒ることはなく優しくたしなめてきた。

そのままどこからかだしてきたミネラルウォーターで軽く口をゆすぎ、射精後の倦怠感でまだ脱力している俺と、行為をしている際に若干よれてしまった自分の服装を整え立ち上がった。

ぬきたし

………

「さっ、とりあえずこれでスッキリしたはずっすね？・じゃ、デートの続きにれつつごーっす！」

どうやらスス子の中では、今日の一連のことはデートということになっていたらしい。

「今日は、見たい映画があるんすよー！ばなはいせんも一緒に行きましょ行きましょ？」

「まっ、待て…おい引っ張るな！」

さっきまでの行為がまるでなかったことかのように振舞うスス子。立ち上がったかと思えば、俺の手を引きメインストリートを走っていく。

映画館についたころには、射精後ということも相まって息が完全にあがってしまっていた。

「ス、スス子…一応こっちは射精した後だからもうちよつと手心を…」
「いやー、そこまで気にしてなかったっす！そーういえばさっきそんなことしてたっすもんね」

いつものオナニーでは複数回発射することは日常茶飯事であったが、今回の射精は前日からの我慢がたたってか或いは行為自体に激しい興奮を覚えたからか、一度の射精で満足しているようだ。

「まあ、あまり気にするな。その…実際、気持ちよかったから、いい」
「おおーっ、もしかしてパイセンってばススのフェラテクにお熱になっっちゃったっすか？」

「ああ。一回で満足してしまうほどには、素晴らしいテクニクだった」

いつものような気楽さで茶化してくるスス子に対して、誇り高き童貞としては不本意ながらも正直に感じたままのことを伝える。

「——そっすか。…なんか改まっていわれるとちよつと照れちゃうっすね、あはは」

そこで無理やり会話を切り上げるかのように、スス子は前を向いたまま手を引っ張って映画館のロビーへと一緒に入っていった。

それ以降は意図的なのか特に会話らしい会話もなく、チケットを

二人分購入したのであった。

「ちなみに、何の映画を見るんだ？」

「ファック・トウ・ザ・フューチャーっす」

そろそろこの島偉いところから怒られたりしないだろうか。

「本島では随分前に流行った映画らしいっすけど、それがとうとう青藍島に上陸すると聞いたのでいてもたってもいられなくなっちゃったっす！」

「なるほど、それはタイトルがアレンジされているだけであらずじは本島でやってた映画と大差ないんだな？」

「そっすねーほとんど大差はないはずっす。

確か親友のドクターって博士を手伝って、タイムトラベルして昔の貞操観念ユルめのカワイイ女の子をやりにいこうみたいな感じの話っすね」

タイムトラベルにかける情熱が大変不純である。

「いわゆるタイムパラドックスみたいな問題も扱ってるらしく、ピッチピチだった頃の実の母親をうっかりやって孕ませたら、生まれる子供は誰になるんだ!?!みたいな考えさせられる部分もあって好評らしいっすよ」

若い頃の母親位一目見て判断してくれ。

そんなこんなであらすじを聞いてるだけでも不安になってきたが、チケットを購入してしまったものは仕方がないので大人しく鑑賞することにした。

映画に疎い俺でも知っている大作が、青藍島に流入する際にどれほどのローカライズを受けるのかは興味深い所でもあるからだ。

「あつ、ちなみにシアターではヤリモクシアターと見る専シアターがあるんっすけど、今回はちゃんと見る専選んだのでスう中できるはずっす」

「良い判断だ」

ヤリモクシアターとか入らないでも阿鼻叫喚が目に浮かぶ。

無事座席に着席し、周囲の青藍島らしからぬ光景に一瞬目を疑う。シアターがほぼ満席となる着席率であるのに、服を脱いでる人もいなければ、嬌声を上げている人もいない。

全員がしつかりと席に座って上映を待ちわびているではないか。

(これは、映画もあらずじだけおもしろおかしくされていて、実は中身はまともなのではないのだろうか)

そんな期待を胸にしながら、俺とスス子も指定された席へとつくのであった。

……

……

……

結論から言おう。

まともではなかった。

主人公のマーチンは、あらずじで聞いた通りのチンポに脳がついてるかのような思考回路であった。

ドクターはまあ、いわゆるよくいるマッドサイエンティストとしては普通であった。原作に近い存在だ。

しかしマーチンがヤバイ。過去にタイムトラベルしてしまっただけから最初にやることとその辺のカワイイ女の子を適当にやることだった。

何人かとサクつと関係を持ちスッキリしたマーチンが、当時の若かりしドクターに会いに行き未来から来たことを告げ協力して未来に帰る…という流れで話が進行していったが。

そのサクつと関係を持った相手の一人が若かりし頃の母親で…といういきなりの消滅の危機と、種付けはすんでしまったという事件解決の難易度の高さにはハラハラした。

しかし、最終的には実の父を交えて再び女の子達と乱交することで、父に自分の精子を上書きさせるといふ荒業な解決法で消滅の危機を回避していた。

これには思わずなるほどそういう手もあったか、と唸ってしまった。

最終的には無事に現在に戻りつき、乱交した時に父と他の女の子達の間でデキた異母姉妹達とちよつとスケベなことができるような関係になり。

マーチンの下半身関係も潤った所で一件落着。

と思いきや未来からタイムトラベルしてきたドクターが、未来で起こったトラブルを解決するため同行してくれと頼んできて。

マーチンとその場にいた異母妹を乗せて未来へとタイムトラベルしていくところで今回の映画は終わった。

……
……
……

「ばなさん的にはどうっすか？ さっきの映画」

時間も既に早くもうすぐ日が沈みきるという頃。

上映が終わり映画館からの帰路についている最中、スス子に感想を求められた。

ここに来て奈々瀬先生の教え『女子に感想を求められたら、良い感想なら率直に伝える！』を記憶の底から引っ張り出した。

「割と展開から目が離せなかったのと、意外にもドスケベシーンが淡泊というか青藍島というよりは洋画寄りのアツサリ感が出ていたことに驚いた」

「あー、そのスケベシーンにこだわる必要性がないって製作元が判断したのかも知れないっすねー」

「後は、消滅の回避の仕方が結構ツボではあったな」

「アタシもあらすすだけは聞いてたんすけど、そういう風に持つてくかー！とは思ったっすよ」

意外にも、映画の感想を言い合うだけでも会話が盛り上がった。

元が昔流行った映画で、ある程度内容が知れているためにいまひと

つに終わるといふこともなく、満席も納得の内容であつたと言わざるを得ない。

「……あ、あのっ」

「どうした？」

先日のショッピングと同じ、SSの寮と我が家への道が別れる付近まで来たところで。

スス子が急に立ち止まったかと思えば、なにやら指をスリスリと擦り合わせていた。

新手の祈祷だろうか。

「——あ、あー……橘せんぱいは、今日楽しかったっすか？」

「なんだ、そんなことか。勿論楽しかったぞ？」

すこし伏し目気味に尋ねてくるスス子に即答する。

「ほっ、本当っすか！あ、ならよかったっす。

喫茶店で話を聞くだけだったのに、映画にも無理やりついてきてもらって、フェラまでして、これでもし迷惑だーってなったらどうしようかなって思ってたところで……」

確かに、当初には喫茶店で話を聞く！以外のことは何一つ予定されていなかったことだ。

「しかし、デートとはそういうものだろ？始め強く後は流れでと相場は決まっている」

「えっ、とそーっすねっ。デートって茶化して言いはしたっすけど、アタシも少し……いや結構、意識してたんっすよ。だから服もちよーつとだけ……気合入れて……」

「ああ、俺も正直に言えばそういったことを意識していた」

「意識してきてそのシャツかどうしようもない服のセンス」

「なん……だと……？格好いいだろうこのシャツ!？」

少しだけ雰囲気もそれっぽくなってきたかとも思ったが。

いつの間にかなんてこともない、いつも通りの空気感になっただ。

「デートっていったらデートではあるんですけど、また明日からは普段通りのばなはいせんとススの関係に戻るんっすからあんまり気にしないでほしいっす」

ちよつとだけ悲しそうにそう告げるスス子の愁いを帯びた表情に、少しモヤモヤとした気分になった。

「忘れてくださいい！とは言わないっすけど、そんなに意識しないでいいんっすよ…あ、でもまたススのおフェアでスッキリしたくなったらもしかしたらシてあげるかもしれないっす！」

そういつて口元をアピールして笑顔を作る少女のその笑みが、今は無理をして取り繕った物に見えてしまう。

この子はどんな思いをして、この笑顔を作っているのだろう。

目の前の伊波という少女を本当の意味で笑顔にさせるにはどうしたらいいのだろう。

そんな考えが頭の中をクルクルと回っていた。

(こんな時、今までやっていたゲームの主人公ならどうするのだろうか。どんな展開に持ってっていただろうか)

考えてしまった。

(こういう時は一枚絵が表示されて、そしてキスの流れだ。)

思い浮かんでしまった。

「キスが、したい。」

つぶやいて、しまった。

「何言ってるんだこの先輩…」

スス子に怪訝な目で見られてしまった。

「ほんとうに…なんすかそれ——えいつ」

そして。

——キスされて、しまった。

「んちゅーっ、じゅるっ、れろっ…んむっ、ぬちゅるっ、んむうーっ

「！」
唇を触れ合わせたかと思いきや、すぐさま舌がその先へと侵入しようとして暴力的に押し込まれる。

唇の裏の肉を舐め、歯を舐り、やがて俺の舌も絡め取られる。

その動きに対して、精々自分の舌の動きを合わせることにしかできなかった。

舌の抽送に合わせて送られてくる唾液が、こちらの唾液と混じってとけていく。

「んちゅっ、ちゅぱっ、はむっ、れろっ……」

そのキスは10秒、20秒、やがて体感時間も分からなくなり、お互いの鼻で呼吸する荒い息が、まるで一つになってしまったかと思う位まで続いた。

「ぷはあっ——なあーんだ、やっぱり、バナさん、キス下手っぴじゃないすか」

「下手じゃないが!？」

長く続いたキスが終わった後、スズ子はそう言って先ほどまで立っていた場所に戻っていった。

しかし、先ほどとは違いその笑顔がいつも通りの無邪気で楽しそうな笑顔になっているなど、感じた。

取り繕っているように見えない、自然な笑顔。

「……勘違い、しちゃってもいいんすか」

「勘違いではないかもしれないぞ?」

「……今までみたいに振舞えなくなっちゃうかもしれないすよ」

「人同士の関係は、絶えず動くものだ」

「……本気で、好きになっちゃっても、いいってことっすよね?」

「——振り向かせることが、できると思うのならば」

「……じゃ、また週明けに、学園でっす。今日はありがとっす。本当に楽しかったっす——淳之介センパイ」

「ああ、俺もだ。また週明けに会おう。——伊波」

こうして、俺達は先日のすつピングデートと同じようにそれぞれ帰路についた。

少しだけ違うのは、俺達がそれぞれ今日をデートであると前回より強く意識していたことと。

夢の中と同じように互いに名前呼びあい、キスをした——という夢ではない事実が残った事くらいだろう。

帰ってから、中間射精管理録ハメカワ2日目『管理時間外に射精しちゃったver』を再生した。

が、今日の記憶がフラッシュバックして射精管理にはあえなく失敗してしまったのであった。

その7 スス子すこ

『んちゅっ、れろっ……ちゅぷっ』

青藍島の景色が日に沈むころ、道を歩く二人の間で口づけが交わされる。

『ちゅむっ、じゅるっ……』

相手を貪るようなキスに翻弄されてしまう自分に

『やっぱり、バナさん、キス下手っぴじゃないすか』

それでも不思議と劣等感を感じないのであった。

……

……

……

「——ッ!？」

朝だ。

何の変哲もない、代わり映えない朝だ。

鳥のさえずりもあえぎ声も、耳には入っているがそのまま通り過ぎていく。

あの喫茶店でのいろいろから始まったデートから早くも数日が経った。

二人でのエロエロを経たからか色々変わったことがある。

まずB世界の追体験である夢をパツタリと見なくなった。

その代わり見るようになったのは、A世界で起こった俺とスス子のやり取りである。

それも些細なものから今朝のようなキスシーンまで多彩だ。

急に夢を見なくなった理由まではわからないが、なにかが一段落ついたから……だと思おうようにしている。

次に、俺とスス子の関係性の変化について。

この期に及んでスス子が俺に好意を持っているかどうかかわからな

い——などという朴念仁ではない。

俺の中に渦巻いている、このいうなれば『この後輩みてらんねーぜ。おもしれー女』という気持ちがある。恋ではないにしろ何かしらの好意であることは疑いようもない。

が、先日のアレは告白というよりかは『宣戦布告』

お前のこと絶対恋に落としてやるからな覚悟しとけよ!? おう、かかってこい!といった選手宣誓だとおそらく互いの中で認識している。

少なくとも、俺はそう思っている。

個別√までのフラグはきっちり立っているものの、肝心の告白シーンまで段階が進んでいないようなものだ。

たとえば週明けの最初の登校日。

『ばーなぱーいせん!』ムギユツ

『おう、スス子……当たっているぞ?』

『当たってるに決まってるじゃないすか? どうだ嬉しいすかー、童貞サシン? ほれほれー』

と、このように互いに呼び方や距離感が戻っているように見えても、その実以前よりも近づいているのだ。

いわばこれは恋に落ちるか落ちないかの勝負。

その勝負にスス子は何を使っても構わないし、俺はそれを鋼の童貞力で受け切るのみである。

そう決意を新たにしながらリビングへと降りていくと、朝だというのにアサちゃんと鉢合った。

「おはよう、兄い。あのさあ、ウチのクラスにSS的那賀さんっているじゃん? あのスッススの子。その那賀さんに昨日メチャクチャ兄のこと聞かれまくったけど何だったのアレ?」

勝負は情報を制したものが勝つ、か。いい教官を持ったものだな。

「神聖な勝負の最中だ。ちなみに何を聞かれたんだ?」

「兄の性癖、というか好み?」

「なるほど。それでアサちゃんはなんて返したんだ？」

「少し前までは処女厨拗らせてたクソインポ兄貴だけど、最近ではこの島のよさに目覚めたのかギャルビッチと実の妹でする3Pは最高だぜ青藍島にきてよかったー！って毎日言ってるって返しといた」

「後半部分妹の好みになっていないか？」

数ある情報の中から正誤を見極める技術こそ情報戦において真に求められるスキルである。

俺のオペレーター（B世界）であるなら、我が妹の情報攪乱を乗り越えてこそだ。

そんな話をしていると、文乃も何かを言いたげにこちらに寄ってきた。

「淳之介さん、文乃のところにも、その、すっす？の方？が参られました色々と訊ねてゆかれました」

「文乃、そのすっすというのをもう一度」

「す、すっす？」

「むむむっぽく自己紹介を交えて」

「む、むべっす……文乃っす……ふんす！」

かわいい。シャッターチャンスだ。

「那賀さん文乃のところにも行っただ。文乃は何聞かれたの？」

シャッター音を響かせている間にアサちゃんが話を進めてくれる。よくできた妹だ。

「い、いえーい——こほんっ。淳之介さんの、お食事の好みを根掘り葉掘り聞いてゆかれました。」

カメラに向かってピースをしていた文乃が我に帰ってアサちゃんに答える。

「んで、文乃はなんて答えたの？」

「はい。淳之介さんは私の作った料理であれば大抵のものは大変美味しそうに食していただいております、と」

あながち間違いないところではあるが、その言い方では回答になっていないのでは？

「いや文乃それ先輩に対してナチュラルにマウントとってるぞ？言い

方もう少し考えよ?」

アサちゃんがお姉ちゃんしている。がんばれアサちゃん。

しかし、アサちゃんや文乃に話を聞くとは、身近な人物から徐々に徐々に外堀を埋めていこうというのだろうか。

(だが、俺は決して屈しない……ドスケベな誘惑にも耐え切ってみせる……)

「それはそれとして、アサちゃんもちよつとお調子者な同級生っていう新たなジャンルを開拓しておこうな?」

「なーにが、それはそれだ!アタシは奈々瀬さんと女部田先輩と兄のスーパーギヤルビッチ井以外は認めないやい!」

「むっすむっす!むべっすむべっす!」

一家の大黒柱である俺に一悶着あつても、やはり橘家は変わらないのであつた。

……………

ぬきたし…っす

……………

「おーい、淳之介!」

放課後廊下を歩いてっていると、後ろから声をかけられた。

振り向くと、シユウ君がなにやら慌てた顔でこちらに走ってきているところだった。

「シユウ君……SSなのに廊下を走るとは何事だ?」

「そんなことは些細なことさ。それより大変なんだ淳之介!」

「廊下を走るほどに大変なのか?」

「そうさ!……最近だが淳之介、君のデータを嗅ぎ回っている不届き者がいるようなんだ。」

「俺のデータを?」

意外な言葉である。

データを嗅ぎ回るなどという不穏な単語に、思わず体が反応してしまふ。

仁浦氏は今やエナジードリンクの販売に努めているし、SSがいまさら俺のことを疑う理由もなし。

A世界での決闘以降姿をみない防人老人も、わざわざデータを求めずとも他に方法はいくらでもあるはず。

また新しくこの島を脅かす脅威が現れたのかと勘繰ってしまふ。

「僕も直接聞かれたさ。僕が今まで収集してきた君のデータを開示してほしい——だなんて無茶な要望だったからもちろん拒否したさ」

意外な行動である。

シユウ君のデータベースから得られる情報など、新手の脅威にとっては皆無に等しい。

これはシユウ君のデータ収集能力をけなす訳ではなく、単純に友人として出会いデータをとりはじめたタイミングがNLNSの活動の必要性がなくなった時だからだ。

必然的に得られる情報も、戦時の俺達の動き方ではなくプレイヤートや趣味など個人的なものに留まるし、それより重要な住処などの情報も入ることはない。

誰が、いったい、なんのために？と頭の中で疑問符が渦巻いている。

「それにしても、直接聞くななんて事は相手は顔見知り——」

「悪いが淳之介…どうやら追っ手が来てしまったようだ。これにて失礼するよ！」

なのか？とそう聞こうとしたところで、シユウ君は突然走り去ってしまう。

結局誰がシユウ君伝手でデータを聞き出そうとしたのかという肝心なところは分からずじまいであった。

シユウ君のデータが聞けていないぞ。

むにゅっ

「どうしちゃったんすかねー、ベルトさん？急に廊下なんか走り出して」

「なんか追っ手が来たとか言っていたぞ」

腰に両手が回されて、背中にはやわらかい二つの物体の感触。

どうやら抱きつかれているようである。

もちろん相手はスス子だし、なんならこんな風に何も言わずに抱きついてきたのはここ数日でこれが初めてではない。

というか最近はいつもの『ばーなぱいせーん!』が聞けない時が多くて少し寂しい。

「島外の人間かは分からないが、最近俺の情報を嗅ぎ回っている人間がいるらしい。シユウ君も直接聞かれたと言っていたしスス子も十分気をつけてくれ。……それにしてもなぜシユウ君のデータベースを?」

いや本当になぜなのだ。

そのデータには俺の歴代購入同人作品のデータベースとそこから導き出されるオススメ作品を紹介するメカニズムしか導入されていないはず……

「あー、案外ハニトラみたいな感じにシモから落とすために調べてるかも知れないっすよ?」

「ハニトラ、そういう手段もあるのか……」

「うんうん、特にパイセンは青藍島だからって素性も知らない女の人とススケベスススしたらいけないすからねー?」

「肝に銘じておこう。ところで今後ろから胸を押し当ててくる怪しい女がいるんだが、それはどうすればいい?」

「それ、はー、血統書つきの由緒あるブランドおまんこなので即ハメおつけーってやつっすね」

「血統書」

犬か何かだろうか。

ようやく満足したのか、押し当てていた胸ごと背中から離れていく。

「ほらほらー、どすかどすか?SS業務でたまたま見つけた無人のスポットがあるんっすよ」

お尻をフリフリとゆすって誘ってくるスス子。

その誘惑には屈しないようにしつつ、少しだけ気になっていたことを聞く。

「なあ、スス子」

「なんすかパナばいせん」

パナ焙煎コーヒーとかありそう。

「いや……こうして狙われているというか墮としにきているというのは感じるが、そもそも話なぜ俺なのだろうかとふと疑問に思ってた」
一連の夢から互いを強く意識することはあっても、それはあくまで些細なものでしかない。

他に何か要因があったからこそ、今のような距離感になっているではないのだろうか、柄にもないことが気になっていた。

「……あー、それ聞いちやいます？ ススとしては物凄く恥ずかすうことになるのは予想できるんであんまり話したくないんですけど……」
「聞いちやいます」

俺の真剣なまなざしから、避けては通れない話題と覚悟したのだろうか。

少し大きなため息を一つ吐いて。

スス子はいつぞやの（といってもそこまで経っていない）あーんの時のように、少し目をそらして気恥ずかしそうに話し始めた。

「ちよつと想像してほしいんですけど」

「ふと見た時に惹かれた相手がドスケベ戦役の英雄として祀り上げられてて、お近づきになろうと思つて話しかけたらアタシとすつごく距離が近くて

……まるで何年もい居浴つた友人みたいに振るまわれて、段々と一緒にバカ騒ぎをしていくようになる、っていう関係性の人がいて」

「それで恋心を抱かないほうが、頭どうかしてるっすよ」

「でも、その人の周りには前々から仲良くしてる美人さんが沢山いて、これじゃあアタシはよくて精々友達ポジション止まりかな？ なんて諦めてたら

その本人から、勘違いしてもいいぞー、本気で好きになって俺のこ

とを振り向かせてみせろー、なんて言われて」
「そんな挑発されたら、ぜったい、ぜったい、ゼーったい、アタシに夢中にさせたくなくなっちゃんすよね」

なんてこともないように言い切るのであった。

俺は驚きのあまり二の句が継げなかった。

「今は、返事はいらぬんです。いつか絶対橘先輩から、本気で、心の底から、愛してるって言わせてみせます」

その言葉は、俺に言い聞かせたものなのだろうか。

或いは、自分自身への決意表明だろうか。

それは分からなかった。

「……なーんて、ちよつと湿っぽくなっちゃったすね。ついでにアタシのオマンコも湿ってきたんで当初の予定通り空き教室へレッツラゴーっす！」

スス子が俺の体をずるずると引つ張っていく。

先日スス子との真剣勝負に負け、すっかり負け犬精神が身についてしまった体は思うような抵抗をしてくれない。

この体が動かないのは敗北のトラウマのせいだ。他の要因はないはずだ。

放課後の誰も居ない教室で、二人きり。

かたや妖艶な雰囲気纏う少女と、かたや借りてきた猫のように大人しいタチで橘淳之介。

教室の机を少しどかして作ったスペースに少女は立ち、反対に俺は椅子に座らされている。

「いつか言ってたすよね、愛がないセックスはくなんて。」

「……ああ、誇り高き童貞は愛がないセックスなど決してしてはいけない。」

「愛してるなんて大仰に言っしてほしいわけじゃないんすよ。ただ、スス子すこだー、って言ってくれれば今はそれでいいっす」

彼女が真に求める愛を、今俺が持ち合わせていなくとも。
今俺が持つ親愛を表現すれば、それが性行為の大義名分になる、と。
性愛も、親愛も、友愛も、等しく愛である。
そういう理論なのだろう。

普段であればこのような挑発には決してノリはしなかつただろうが、今回は少し状況が違う。

スス子の気持ちの吐露に、俺の心が揺り動かされているというのは動かぬ事実だ。

そのユラユラとゆれている心が、俺の中にある愛をさらけ出してもいいぞと判断してしまう。

「今は、これしか言えないが。——スス子、すこだ」

「そつすか。……アタシも淳之スコ先輩がすこつす！」

そう言うやいなや、唇を合わせてくる。

その瞳はいつもの快活さからは程遠くとろんと細められており、まるで発情した肉食獣を思わせる。

キスをしながらも、手はこちらのズボンをやさしくまさぐり勃起を促してくる。

スス子すこだ、と愛を語ったのだ。

であれば、愛のあるセックスになだれ込むのはある意味当然の帰結であった。

その8 ♥ ススガキヤ

スス子は俺を椅子に座らせたまま、ズボンとパンツを器用に下ろして男根を露出させた。

前回スス子に見られたときとは違い、平常サイズである。

「うーん、ちっちゃい時は一般的なサイズなんすけどねえ」

人のチンポをマジマジと見ながら、指で長さを測ったり、陰囊を手のひらでポンポンと弄んでいる。

「ちっちゃくないが!」

大きさのことを言われてしまい、ついつい反応してしまう。

世の男子に小さいという言葉は禁句なのだ。

「勃起した時のサイズと比べたらつてことなんすけど、たぶん伝わってないっすよね。」

「すーんなに気にしてるなら、すっすと大きくしやがれっす」

しっ、しっ、しっ、と。

ゆっくりとはあるが玩具で遊ぶような手つきから、性的興奮を与えることが目的の手つきへと明確に変わっていく。

この思案での出来事を経てコンプレックス自体は解消したものの、若干の勃起不全をいまだ抱えている俺のイチモツであるが。

その橘のチンポを持つてしても、スス子の手コキがこれほどとは読めなかった。

島の夕チバナ一生の不覚。

こすこすと単調に軽快に擦られていくうちに、甘勃ちではあるが段々と肉棒が硬さを帯びていく。

それを見たスス子がレーツつと唾液を潤滑剤代わりに垂らした。

「ここから、もう二段階くらい大きくなるんすから、人体の神秘ってすごいっすよね」

言いながら、慣れた手つきでさらにモノを扱くスピードを上げられる。

柔らかくも温かい手の感触と、出された内は温く棒に馴染んでいくほどに冷えていく唾液の相反する感覚に翻弄される。

その心地よさが表情にも出てしまっているようで、スス子も心なしかニヤついている。

「あれあれー？バナさんってばススのシコシコに耐え切れなくてもう射精したくなっちゃってるっすか？なっさけなーい」

「くーっ、このススガキめ！お前なんか絶対に絶対負けたりしない！」

突如として現れるスス子のススガキ人格。

しかし俺には、メスガキには絶対に負けられないという信念が魂に刻み込まれている。

この戦いに決して負けてはいけないのだ。

ぬちゅ、ぬちゅ、と。

それまで乾いていた肉棒の摩擦音が、唾液ローションが混ざったことで湿った音に変わっていく。

八分勃ちであったチンポも、とうとう勃起しきった。

「口ではなんとも言えるっすけど、体は随分正直じゃないすか」
言うなりスス子が、シゴくペースを変えてくる。

それまでは幹に手を這わせての手コキであったが一変。

竿全体と、亀頭をぎゅっぎゅっつと緩急つけて握りながら刺激してくる。

「くうっ！……この生意気なことを言う口を塞いでやる……！」

スス子は、その身体を椅子に座っている俺に預けながら事に及んでいる。

そのために、俺は上半身をゆすつたり程度の抵抗か、或いはチンポに力を籠める程度のことしかできない。

「えー、ススのことが大すこなパイセンからの頼みだからな……でも、ただで黙ってるってのもあれっすし、そうだ！」

えむっ、ちゅっ、ちゅるっ。

なんてことだ。

このススガキは自分の口を黙らせるのに、俺の口を利用したのだ。

こんなことを言っておいて、本当は適当に口実つけて自分がキスしたかっただけだろう。

長いキスを交わしながらも手コキのペースは落ちる事がなく、むしろ早くなっていく。

ただでさえ密着していた二人の距離は、キスをする事によって互いの胸が擦れあい、その服の内の鼓動まで聞こえてきそうなほどに近くなる。

「んむーっ、るちゅ、んぷはあつ。バナさんキスされながら手ですこすこされるの好きなんすか？」

息が荒くなってしまうほどのキスを切り上げたスス子が再び俺を挑発する。

これまでの愛撫と今のキスとで若干酸欠気味になった俺は、それに返事することなく外聞も気にせずぜえぜえと酸素を取り込んでいた。

「答えられないほど、気持ちよかったんすね？じゃあ、このままススのおててで一発ぴゅっぴゅしちやっってくださいっす」

「な、待て——」

やめろ、とそう言おうとしたが、急激に加速した手の動きとそこから来る快感によって言葉を紡ぐことができなかった。

(自分でススより、気持ちいい!?)

恐るべきスス子の手腕。SSがそういった訓練を受けさせていた事をふと思い出す。

「射精したいっすか？射精したいっすよね？」

その問いに、うんうんと首肯することしかできない。

しかし、スス子からしたらそれだけで十分だったようで、にっこりと笑うと手を動かすペースをことさら速めてきた。

突然スス子が耳元に顔を近づける。

「焦らしたりとか、そういう手心は一切かけないのでさっさと無様に射精すっすよ」

「後輩のおてておまんこ気持ちよくて腰が引けちゃうんっすよね？」

か細い声でささやかれると、普段からの条件反射でなおの事興奮をそそられる。

「スス子ツ……そろそろっ……!」

「イっちゃいたいんっすよね? ススに耳元でひすひす話されながら手に射精しちやいたいんすよね?」

限界が近い事を伝えると、それに応じるようにチンポを握る力がキュツと強くなる。

ただひたすらに射精させることを目的とした、搾り取る手つきへと変わっていった。

少し痛みすら感じるほどの、激しい締め付け。

「センパイは偉いっすね。自分のお射精が近い事をちやーんと伝えることができるんっすから」

「そんな立派なセンパイには、ご褒美にとつてもキモチいい射精、させてあげるっすよ」

そんな甘美な誘惑を跳ね除けるほどの意志は、暴発寸前の頭には残っていないかった。

「じゃ、いくっすよ?——はむちゅっ」

再びの口付け。

スス子の舌がぬるっと口内に侵入してくる。

それに抗うほどの余裕はなく、ススガキのベロにいいように口内を弄ばれてしまう。

「んふう、ちゅっ……はあっ、むちゅっ、れろっ」

またしても、満足な呼吸をする余裕すら与えないほど激しいキスに頭が少し朦朧とする。

柔らかい舌とくちびる。

動くたびに擦れるもっちりとした胸。

そして激しく締められ扱かれながらも、決して不快ではない肉棒。混濁した意識の中で、より一層それらの感触が際立つ。

まるで催眠音声を服用している際のような感覚。

(5……4……3……2……)

頭の中でそんな声が聞こえたような気がした。

それが幻聴なのか、実際にささやかれたのを理解できなかったのかは分からない。

だがそのカウントダウンは、身体に染み付いてしまった癖のようなものを誘発させる。

快楽を最大限享受できる状態へと脳が切り替わり、訪れる最期の瞬間への準備を始める。

わずかに残った力で腰を浮かせ、スス子のおてまんこの奥へ奥へとチンポを打ち付ける。

(1……………)

ただでさえ酸欠気味の身に追い討ちのように自分から鞭を打ってしまうが、そんなことはお構いなしだった。

チンポはもう我慢汁でトロトロ。

柔らかい胸の感触が更におしつけられ、口内陵辱も激しさを増す。

全身を使って締め付けられるかのような錯覚さえ生んだ。

その締め付けに応えるかのように、スス子のおてまんこの最奥に向かつて渾身のピストンを放ち――

(……………0……0!0!0!0!ぜーろっ!)

射精した。

俺とスス子の手との子供がデキてしまうほどの射精だと、わずかに残った意識で思う。

(孕め、オラ……………)

長かったキスも、スス子が離れた事でようやく終わり深呼吸をしながら絶頂の余韻へと浸る。

その間にうまく手のひらで受け止めていた精液を処理するスス子。

一滴も零れていないように見えるほど綺麗な受け止め方をしたよ
うで、是非今後の自慰の際に参考にしたい所だがあいにく朦朧としていてどんな技術が使われていたかはさっぱりだ。

などと考えていると、処理を終えたであろうスス子がこちらに笑顔

で向き直る。

「どつすか、バナさん。ススガキのおててまんこに無様に敗北射精しちゃった感想は？」

「負けてないが!？」

なんだこのススガキ。

人が心地よい射精感に浸っているときにわざわざチンチンイライラさせるような事を言うだなんて。

「えー……あんだけトロんとした顔して、息も絶え絶えーって感じなのにまだ強がっちゃってー大人げないっすよ？」

「大人の男性だが!？」

「でもでもー、大人のオスがあんな情けない声で鳴いちやうなんて、ちよーつと惨めっすよねー？」

このススガキ……!？」

チンチンもといわからせ棒が、臨戦態勢に入る。

「ススガキにー、目の前でこんなにお尻フリフリされてもー、反撃できないダメダメ大人なんっすよねー？バナぱいせんは」

素晴らしいながら、机に手を突きお尻を左右にふりふりしてくる。

その弾みに、以前見た柄とは違う薄桃色の可愛らしい下着が目映る。

SSはどうせ汚れてしまうし脱がされるからと、下着にはこだわらない……なんてことを誰かから聞いたような記憶もあるが。

もしかやこれは、スス子なりの挑戦状かなにかなのだろうか？

「ススガキめ、チンチンイライラさせやがって！責任とってお前の身体使わせろ！」

下着をすつと横にずらし、十分に秘部が濡れている事を確認してからススガキわからせ棒を一気に挿入する。

「いぎいっ！さ、さすがにもうちよつとゆっくりと慣らしてから……つてのはダメすか？」

これには堪えたようだが、細かい配慮をしてお仕置きにならない。

イチモツを挿入しきると、それを待っていたかのようにキュンッと膣壁が締め付けてくる。

程よい締めまりの膣内の固さと、膣壁部のヒダヒダの柔らかさがいいコントラストとなっている。

これまで作ってきたどの芸術作品よりも感じられる、女性らしさ人間らしさに、今スス子を犯しているという実感が湧く。

先程まで手玉に取られていたその相手を、後ろから自分の好きなように突き倒せるという事実でより一層興奮する。

「その生意気な口からアンアンあえぎ声しか出せないようにわからせてやる」

「言ってるっす。アタシはチンポなんかに負けたりしないっす！」

「ススガキが、減らず口を！」

見た目より細いスス子の腰を掴み、激しくチンポを挿挿する。

互いの腰を打ちつけ合う生々しい音が教室に響き渡る。

これだけ激しい音を出していたら誰かが来てしまうのではないかという緊張感がわずかに芽生えるが、それも目の前の極上の女体を貪ろうとする理性の前には些事に過ぎなかった。

「……ンツ、センパイのアレ、全部入っちゃってるんすか？」

スス子が嬌声を出さないようにしながらも訊ねてくる。

「ああ！スス子は身体が大きいからな。全部丸ごとスツポリと入ってるぞ」

「し、身長の話は、あつ、言うなア！」

スス子が与えられる快感に耐えようと、机に必死にしがみついている。

ピストンが激しくなればなるだけ、ギシギシという音が肉を打ちつけ合う音に混じっていった。

温かく柔らかく、それでいて自分のイチモツにしつくりとくるそのススガキマンコへと連続ピストンを行うと、先程射精したばかりだというのにまた射精感が芽生えてくる。

しかし、それに負けて早い射精などしてはならないし、ペースを落とすなどもつてのほか。

あくまでこれはお仕置きセックス。わからせの儀。

一切の妥協や手抜きは許されない。

「ふぐっ、ううっ……んっ……ハッ」

互いに口数も少なくなり、ピストンの音、机がきしむ音に、スス子のこらえるような喘ぎが混じる。

先程まで感じていた射精感もいったん収まり、さらなる快感恍惚感へと変わっていく。いわゆるピストンズハイだ。

「どちらが強い立場か分かってきたか？ススガキ、下！大人、上！」
「い、イーツだ！そんなよわよわおちんぽに、ススが負けるはずないっすもんね！」

見るからに限界が近いであろうに、まだ生意気な事を言えるとは。

「なら、俺との子供でも孕んでもらおうか？そうすれば、ススガキから一人のススママになり生意気な事も言えなくなるだろうからな！」

「なっ!?発想が、ぶっ飛びすぎ、っす、んあっ」

目標地点が決まった。

ススガキをわからせ棒でわからせつつ、ママにすることで母性に目覚めさせ二度と生意気な事を考えられないようにさせる。

そのための全力ピストン。

自らの口からも快感に悶絶する声が漏れてしまうが、もうお構いなしだ。

「やっ、そこっ、臆奥っ、いいっ！」

目の前でスス子が乱れているのを見ると、我慢が効かなかった。

絶頂を間近にして、わずかに窄まる膣内。

その抵抗感にことさら射精をかきたてられる。

もう、限界が近い。

「よく膣で覚えておくんだな。これが自分を孕ませるわからせ棒だつてことを！」

「やつ、ダメっ、子供はあッ、赤ちゃんはダメっす……膣内は、絶対ッ……」

「ススガキも ママになったら 形無しだ それ孕めオラ！」

「あっ、ダメっ……んんっくく……ッ」

膣がきゅーっつ、と締まる。

吐精を促すその締め付けに呼応するように、絶頂。

孕ませることを目的とした、深い場所での射精。

子宮口へと精液を詰め込むように、ぎゅっぎゅっつとチンポでそれを押し込む。

「んっ、あっ、はぁあーっ……」

スス子も深い絶頂に襲われているのか、膣全体でチンポに残った精子を搾り出すかのように締め付け続けている。

脳が蕩けるような充実感に襲われながら、射精したままの姿勢でしばらくその余韻を味わう。

ススガキをこらしめてやったという勝利の高揚感さえ覚える。

ふとスス子を見下ろすと、快樂のためなのかその体を震えさせていた。

どのような表情をしているのかも気にはなったが、下を向いたままであったためこちらから窺うことはできなかった。

「ススガキ……つちに顔を向けるんだ」

「はぁ、はぁ……えっ、イヤっすよ……今、人様に見せられない顔、しちゃってる自覚あるんで……」

すげなく素に戻って断られてしまった。

互いに動き出さないうち、少し時間が経過する。

と、突然教室のドアが勝手に開く。

「おい、ここはドスケベ条例の改正に伴ってセックス禁止の禁乱区だ

ぞ！今すぐ外での青姦に切り換える……ん……だな……」

「あつ、やべ教官殿だ」

礼先輩がなぜか扉の先にいた。

「じゅ、淳之介と、伊波!?!ど、どうしてここに、というかここで何をっ
ていうか伊波お前顔がすごくトロけているけど大丈夫か!?!」

トロけているのか。丁度スス子の顔が扉側に向いていて確かめら
れなかったので、その情報さえあれば後は妄想で補える。

「いや、というか二人でここで、やってたのか!?!……ちよつと待て、今
もまだその見えないところで繋がつちやつてる訳なのか!?!」

こちらからツツコミを入れる暇もなく目まぐるしく表情を変えて
行く礼先輩。

いや、スス子に突っ込んだままではあるが。

どう答えたものかと思案していると一人で納得したようで

「あ、あー……今回は黙っておくから、今度からそういった行為に勤し
むならもつと後ろめたくないような場所でやろうな?..な!..」

そ、それじゃあ邪魔して悪かったな二人とも……は、はやめに帰る
んだぞー?..」

そう慌ててまくし立ててから、こちらの返事を待たずしてすすーつ
と扉を閉めてどこかへと走り去っていった。

「注意しに来たんじゃなかったんすかね」

「そうだな」

焦って本来の目的を忘れてしまうところも礼先輩らしいと言えば
らしい。

そんな礼先輩に気をそがれてしまい、どちらからともなく離れ行為
の後片付けをし始める。

「そういえば、トロけ顔、だったららしいな?..」

「………そんなに見たいなら、また今度する時に向き合つてすれば
いいじゃないすか」

「………そうだな」

また今度する。

その言葉に適切な相槌しか返せなかったのは果たしてなぜなのだろうか。

それを言語化する事は、今の橘淳之介にはどうやら難しいことかもしれない。

その9 恋よ実るか

ススガキをわからせてから、一月程度は経った。時折その情事を夢に見るが、以前と比べるとそういった夢を見ることは大分少なくなった。

実際に体を重ねたせいなのか、学園で話す際もぎこちない会話をすることが少しだけ増えた。

ススガキがその度にいつものように軽口をたたいてなんでもなくうに振舞うが、なんでもないなんてことはない。

“わからせる”とはいったものの、この島に来て初めて自発的にセックスをしてしまったことには変わりないのだ。

今までであった相手から襲われてしまい……というパターンでもなく、こちらの世界に戻るために半ば無理やり……のパターンでもない。

互いが相応の感情を持った上での、両者合意の上での性行為であったことは疑いようがない。

それをススガキと大人のわからせ合戦というオブラートに包んでいるだけだ。

いつか、ハッキリとさせないといけないのは分かっている。

これが体だけの関係なのかどうか。

分かっては……いるのだが。

「これより、生徒会主導によるSSとNLNS合同のバーベキューパーティーを開催します」

「予算に関しては、この私SS代表兼水乃月学園生徒会会長の冷泉院桐香がどうにか話をつけてきました。なので、今回は何も気にせずぱーっと食べてぱーっと騒ぎましょう」

「礼？・号令を」

桐香が宣言し。

「はっ！ えー、それでは……ここを、生ハメキャンプ地とする！」

「お肉はナマじやダメだからねー！」

礼先輩と郁子が取りまとめる。

「イベントの導入が随分雑だな!？」

SSビッグスリーの面々が放課後いきなり教室に現れたかと思えば、学園の裏山まで連れて行かれていきなりバーベキューである。

しかし、周囲を見てみると驚いているのはどうやら俺だけのようである。NLNSの他のメンバーは全く動じていない。

美岬はともかく、アサちゃんや文乃までもが慣れてしまったのだろうか。

自然といくつかのグループにわかれていった。

「うほおおおお！お肉ですよ！新鮮なお肉！ああ、どのお肉からいただこうかなー……」

「こら美岬、ちゃんと焼いてからよそつてあげるから少し待ちなさい？」

「うおお、奈々瀬さんの焼いたお肉ですと!?!おいこら力士、あつちで那賀さんが焼きそば屋台やってるからそれ食べて来い。私は奈々瀬さんのお肉独り占めすんだよ」

「どっちも食べますー!どっつあんです!」

「うわ、ダメだこいつはやくダイエツトさせないと。とりあえず共食いにならないようにこのお肉はもらっておくよ」

「アサちゃん、お肉の独り占めはダメよ？折角のバーベキューなんだから皆で楽しまないと損なのだわ?」

「うほおおおお！奈々瀬さんに怒られた！今だけは奈々瀬さんの視線を独り占め……今だけは綱の上で様子を見てもらっているお肉以上の扱い！ありがとうございます奈々瀬サマー！」

アサちゃんと美岬も根っこの部分は大概似たような素質あると兄は時折思う。

「文乃ちゃんは、いつも淳くんの家でご飯を作ってくれてるから今日はお休みしよう？こういう時はお姉さんに任せてたっぷり食べて大きくなるんだな！」

「むへむへ……ありがとうございます」

「つて、もうなんか食べてるんですけど!?大丈夫? ナマジじゃないかそのおニク?」

「はい。あちらのすすすの方が作られている焼きスバと焼きスバでございます」

「ん?焼きスバが二つあるんだな? つて焼きサバと焼きソバだよ!別の料理だ!」

「へいらっしやいっす、新鮮な焼きスバとソースの効いてる焼きスバ焼いてるっすよー!」

「うほおおお!美味しそうな匂い!とりあえず二皿ずつもらいます!」

「はい、まいど!落とさないように気をつけてくださいっす!」

どこにでも湧くなあ、美岬は。

その後少し経ち参加者のおながが膨れつつある時間帯になると、それぞれがテーブルを移動し始める。

SSのメンバーを中心にわちやわちやしてた礼先輩が、黙々と奈々瀬に用意された肉と野菜の盛り合わせを食べる俺の横へと座る。

「どうだー、食べてるか淳之介?」

「ご覧の通り、鉄板の前に立つことなく食べ続けています」

「それは、なんとというか……果報者だな? 私からの選別の牛肉だよ!よく味わえ!」

そう言うと、礼先輩は自分の皿に乗っていた焼きたてお肉を俺の口元へと運んできた。あーん。

「ウマいだろ? 予算が許す限りいい肉を買ってきたからな!」

いつもの調子の礼先輩だ。どうやら、麦ジューズ等は振るわれていないらしい。

「な、なあ……淳之介？……少し聞いてもいいか？」

その後少し歓談していると、礼先輩が唐突に恐る恐るといった感じで尋ねてきた。

俺は無言でうなずいて続きを催促する。

「こ、この間伊波とその、コトに及んでいただろう？……伊波とはどういう関係なんだ？」

ああ。そういえば、以前空き教室でセックスをしていた時に礼先輩に見られていたんだっただな。

「話すと長くなります。具体的に言うところの島の歴史位には長くなるかと思いますが、しますか？」

「ああ、いや。そこまで長いなら大丈夫だ」

軽く茶化すと、礼先輩が少し引きつった顔をして拒否する。

あまり、人様に話せるような内容ではないから少し誤魔化した。

「最近、伊波が悩んでいるようなんだ。具体的に何の悩みかという所までは聞けていないが、もし淳之介が絡んでいるのであればと思っとな。」

「悩んでいる……と言うと？」

「丁度一月前ごろから巡回中によくため息をついたり、ボーっとしていることが増えたとの報告を受けている。実際私も何回かそのような姿を目にした」

……心当たりがないと言えば、嘘になるだろう。実際にソレが原因かどうかは別として。

「で、まあなんだ。この間の教室の件ともし関係があるなら、しっかりと区切りを付けた方がいいぞと、年上からのアドバイスをしに来ただけだ」

「も、勿論双方合意の上であろうことは、淳之介のことだから心配していないぞ！」

返答に悩んでいると、急に明るい声で励ましてきた。

「ありがとうございます。すこし気持ちを整理してみることにします」

「そうか、頑張れ！じゃあ、私はヒナミの所に行ってくるよ。この後も

明日に響かない程度に楽しむように！」

そう言つて席を立つ礼先輩を、手を振つて見送つた。

その後、なかなか減らないお肉の相手をしていると急に身動きが取れなくなつた。

体が見えない何かで縛られている感覚。

以前にも体験した経験のあるこの感覚は……

「糸、か」

「はいそうですSS代表兼水乃月学園生徒会会長の冷泉院桐香のお得意の糸です先輩はいアーン」

またしても言われるがままに、口を開き桐香からのお肉アーンを受け取る。

「あつ、ズルいトーカちゃん！イクもダーリンにあーんするー！」

一緒にやってきた郁子に続けざまに肉をぶっこまれる。

ビッグスリーは全員揃つてお肉を差し出してくるあたり肉食系女子であることは間違いない。

「ね、ダーリン。この間言つてた夢の登場人物ってイナミちゃん？」

いきなりド直球が飛んできた。

ちなみに桐香は、人を糸で縛つてあーんするという危険極まりない行為をした事によつて文乃にお説教されている。

いまだに苦手意識は抜けないようだ。

「そういえば言つてなかったな。スス子が出てきたんだ」

「そつか。とりあえずは解決、したのかな？あの後変な症状が出たりとか、してないよね？」

「問題ない。いつも通り男前な橘淳之介だぞ」

「なら問題ないか」

決め顔で返答すると、まるで興味ありませんよという風に流されてしまう。

「イクの口から言うと、塩を送つちゃうみたいで少しイヤだったんだけど、トーカちゃんのお説教長そうだからイクが話すね。」

今回のイベントね、トーカちゃんがダーリンのためについて計画して

くれてたイベントなんだよ」

なかなか戻ってこない桐香を見かねてなのか、ポツリと郁子が話し始める。

その中のダーリンのため、というフレーズに疑問が湧いた。

「俺のため？」

「うん。ダーリンのため。勿論SSやNLNSの皆にも楽しんでもらえるものになりたい！って気持ちはあるだろうけど、でもやっぱり一番はダーリンのため」

つまり、このバーベキューはあくまで目標を達成するための手段でしかないのだろうか。

「お祭りとかってさ、皆気分がよくなってちよつとした勇気がもらえるんだよ。水乃月にはあんまり似合わないだろうけど、学園祭の打ち上げで告白するとかさ」

それとおんなじだよ。ダーリンに少しだけ勇気を分けてあげたって思っただけだよ。トーカーちゃんが作ったイベントなんだよ？コレ」

「題して、『恋よ実るか!?燃えるハートで肉を焼け！コイカツバーベキュー』ですよ、先輩？」

ようやくお説教から開放された桐香が、いつも登壇しているときのような感覚でイベント名を告げる。

そのイベント名は、最初の桐香での挨拶では語られていなかったはずだ。

「やっぱりイク達も気になるんだよね。そういう両片想いみたいな感じこぢないのを見てると」

「先輩が、後一步を踏み出すお手伝いになればと思っただけです。焼いては食べ、焼いては食べているのです」

「桐香、そんなに食べるとお尻にお肉が――」

「つきません」

「そうか」

つかないらしい。

最早、ビッグスリー相手に隠し通すのは難しいと判断し、単刀直入に聞いてみることにする。

「ある程度分かっていったのか？その……俺が誰を気にしているかっていうのは」

「結構分かりやすかったよ？ダーリン、イナミちゃんが来ると目が泳いで語彙が落ちる」

「どうやら予想以上に分かりやすかったようだ。」

「今、私達は自由に人を好きになり、自由に付き合い、自由に睦み合うことができる。青藍島はソレが許される島に変わったんです」

先輩も自分に少しだけ自分に正直になってみてはどうですか？」

好きな相手と、好きな恋愛が自由にできる島。

俺がこの島に来た当初は、ソレが許されない島だった。

だからこそ、その元凶であるドスケベ条例を潰そうと動いていたのだ。

そして現在。俺は好きな相手が——。

「仁浦のオジサマが、日が暮れたタイミングで大きい花火を打ち上げてくれるらしいんだ」

「時間にすれば今から二時間もしないうちに始まるでしょう。それでは先輩、私達はNLNSの皆さんを誘ってくるのでこの辺りで」

「ダーリン、ファイターー！」

そう言つて、桐香と郁子も俺の元から去っていく。

頭の中では、この後どうすればいいのだろうかという思考が渦巻いていて手を振って見送れたかどうかの記憶さえない。

このイベントは、勇気を出せない俺のために皆が作ってくれているイベント。

皆がどんな気持ちで、このイベントを考えていたのかなんてことはまるで想像できなかった。

「やあ、淳之介。あーん……はもうお腹いっぱいのようなだね。隣失礼するよ」

椅子に座ったまま考えていると、隣に親友であるシユウ君がやってきた。

「ああと……実を言うと、僕は話は大体聞いているんだ。今回のイベ

ントの本当の趣旨も、そのターゲットもさ」

なんのけなしに、世間話のような感覚で打ち明けるシユウ君に、それでももう驚きを感じることはなかった。

漠然と、シユウ君も何らかのアドバイスをしに来てくれたのではないかと、淡い期待すらあった。

「なあ、シユウ君。俺は、どうしたらいいと思う？」

アドバイスを求めてそう質問すると、シユウ君の顔が信じられないものを見たという表情に変わった。

「そんなこと、僕のデータにはないぞ？」

ある意味で聞き慣れた一言であった。

しかし、その一言は助言を求めていた俺の心にやけに鋭く刺さった。

「仮にデータがあったとして、君はその通りに従うのかい？それがどんなに酷いデータであっても？」

……淳之介の口から直接は聞いてない気がしたので改めて聞くが、君はスス子君……いや、那賀伊波という女の子をどう思っているんだい？」

橘淳之介が、那賀伊波という女の子をどう思うか。それを真剣に考えたことはあっても、言葉として真剣に発したことは、恐らくない。だがしかしというべきか。だからこそというべきか。

その気持ちは言葉となつて、迷うことなく口から出ていった。

「俺は、那賀伊波という女の子が好きになっている。一緒にいたいと思うし、隣で笑っていてほしいと、そう、思っている」

スつと、胸の中にわだかまっていた感情のうちのひとつが消えていくような錯覚を覚えた。

自分が、スス子という、那賀伊波という女の子とどう向き合っているのか。どう向き合いたいのか。

それが、言葉にすることでハッキリと見えたからなのだろうか。

「そうか。では君がとる選択肢は二つに一つだ。その気持ちに蓋をし

て何も伝えないまま元通りの日々に戻るか、元通りの日々を壊しても気持ち伝えるかだ。」

「シユウ君。それは選択肢ではないぞ。俺には伝えるという択しか見えなくなってしまうからな」

その俺の言葉を聞き、シユウ君が再び信じられないものを見たという表情に変わりそして微笑を浮かべた。

「どうやらいつもの淳之介らしさが出たじゃないか。僕が隣に座るまでの君とは大違いだ」

「俺は悩めるお年頃ってやつだからな。シユウ君のおかげで踏ん切りがついたぜ」

「うじうじしている淳之介なんて、僕も、僕のデータも見たくないからね。おっといい時間だ、そろそろ花火に誘う相手に声をかけなきゃいけないだろう？この辺りで失礼するよ」

「ああ、ありがとうシユウ君」

今度は、しっかりと立ち上がり手を振って見送ることができた。

踏ん切りがついたというのが一番表現としてはいいのだろう。

シユウ君だけではなく、礼先輩や郁子や桐香もそれぞれが事情を知っていて、背中を押すように声をかけてくれた。

自分でも恋と分かっていなかったこの気持ちを、それでも皆が応援してくれていたのだ。

その事実にも、今更ながら少し泣きそうになる。

が、今はシユウ君の言った通りスス子を花火に誘わなくてはいけな
いだろう。

そう思いスス子の姿を探そうと、先ほど鉄板焼きをしていた辺りを見回すが見当たらない。

一体どこに行ったのだろうか。

「どしたんすか、バナさん。誰か探してるんすか？」

「ああ、スス子か。スス子を見なかったか？」

「何言ってるんだこの先輩、なんか悪いキノコでも食ったんすか？」

いつのまにか、隣に座っていたようだ。

早速本題に入ろうとする俺の手に、なぜか肉の乗った皿と箸が渡される。

「これは一体?」

そして目の前には、口をあけて何かを催促するスス子の姿。

.....

.....

.....

「いや、あーんするっすよ!?!」

妙に長い間の後、突然スス子がキレた。

「スス、さっきまで焼きスバ作りでもものすごく忙しかったんっす! それこそお肉を食べる余裕もないくらいに!」

「それとあーんと何の因果があるかが分からん」

「アーンスールっすよ!」

「いやだからあーんをする意味が——」

「あーんするじゃなくて、アーンスールの法則! あーんをする回数とされる回数が近くなると負担が生じるって法則の話っす!」

ああ! 最初に夢を見始めた辺りで使用した法則か!

「バナさん今日はあーんされてばっかりだから、ススがあーんしてもらいに来たんっすよ。ほれ分かったらはよはよー」

嬉しそうに、口をあけて待つスス子。

その口に、ちょうどいい塩梅でお肉をあーんさせていく。

もぐもぐと味わって食べるスス子。あまりの美味しさに口が軽くすぼんでいるところもまた彼女らしいと言える。

(そうか。こうして、楽しそうにしているスス子を見ると、俺まで楽しくなってくるから)

だからこそ惹かれていったのだろう。

(一度、はつきりと心で思ったことを言葉にするだけで、こうまで変わるものなのか)

「なあ、スス子。今日日が暮れたら花火をあげるらしいな?」

「あー、話には聞いてたんすけど、マジでやるんすか。気合入ってるっすねー」

「一緒に、見に行かないか？二人きりで」

「っ……いいっすよ。見に行きましょう、二人で」

あーんを継続しながら、そんな約束を交わす。

今夜、俺はこの気持ちに決着を着ける。

橘淳之介の、那賀伊波に対する気持ちを打ち明けるのだ。

その後は、彼女が決めることだから。

その10 告白

皆と話している時間や、後片付けの時間も含めるといよいよ日が暮れるまでもう少しというところまで来てしまった。

その最中でも自分の気持ちやハッキリと定まっているからか、スズ子との会話がぎこちなくなることは格段に少なくなった。

目の前の少女が何気ない話に笑ってくれたり、些細なボケに全力でツツコミを入れてくれる。

俺にとって、そんな会話や空気が心地よいものだからこそ、この少女の隣にいたいと思うようになってきたのだろう。

(そしてその気持ちこそが世間一般で言うところの、恋なのだろうな)

バーベキュー用具の撤収作業が完了し、花火をあげる会場のヌーティストビーチへと向かう。

もう冬も近づいてきたこの時期の夜は、海も冷え込み生ハメ目的の観光客も萎えてしまうことから一般の人間は見られなかった。

先頭を歩く礼先輩が振り返り、大きな声で号令をかける。

「えー、もう間もなく花火が上がりはじめ。場所はちようどビーチの反対端なのでこの辺りが丁度よく見えるだろう！ここからは自由行動自由解散とする！」

各々、好きな相手とこの後を過ごすように！聞かれない話やあえぎ声を出すヤツは、うまく人ごみから離れる事！以上！皆今日はお疲れ！」

事実上のイベント終了宣言に、一同が大きく湧き上がり拍手が飛び交う。

今回のイベントは特に大きな事故や怪我もなく、それぞれが料理を楽しみ歓談に興じるというすばらしい結果に終わった。

その最後の締めとして花火があがるともなれば達成感も一入だろう。

一人、また一人と、夕方に約束をしていたのだろう。グループを

作っていい場所を探しに散らばっていく。

そうして去っていく人ごみの中、一瞬だけ奈々瀬と目が合ったような気がした。

(淳、頑張るのだぞ)

と、そう言われているような感覚になる。

多分俺が自覚していないだけで、本当は多くの人に背中を押されているのだろう。

そして奈々瀬もまたそんな情けない俺の背中を強く押してくれる一人。

その目線に対して一つ強くうなずくと、奈々瀬も軽く笑顔を作りながら桐香達の元へと合流し、揃って離れていく。

「ここに残ってるのアタシたちだけになっちゃったすね。パイセン」

やがて、その場に残るのは俺達だけになった。

「俺達もいい場所を見つけなければ。少し、戻るか」

ほんの少しだけ来た道に戻ると、ビーチに下りるために作られた、少し長めの石造りの階段へとたどり着く。

周囲に誰もいないことを確認してから、その真ん中あたりに腰を下ろした。

「スス子、隣来るか？」

「お、おじやまするっす」

そしてその右隣にスス子を座らせて、二人で並んで花火を俯瞰できる位置取りをとる。

「ここなら、眺めがよさそうだな」

少しだけできた高低差でビーチを見下ろすと、さっき別れたグループの幾人かが散見するが、距離が遠いのでその表情までは分からない。

ピューーッ、ドーン！

「始まったみたいっすね」

大きな花火が打ち上がる。え、結構大きいなくらかけたんだあの花火。

などと花火にしばらく見とれていたが、今回やらなくてはいけないことを思い出し隣のスス子を見る。

するとどうやら、スス子も同じように花火を見て惚けていた。

それを言葉で邪魔するのも癪なので、そつと下に置かれたスス子の左手に、自分の右手を重ねる。

「あつ」

と、隣から声が漏れたが、自分の手の上に置かれた手を見て、納得したような安心したような表情でまた花火の観賞に戻ったようだ。

そこから会話も少なに、上がっていく花火を見て互いにわーだのおーだの歓声を上げているとひとときわ大きな花火が飛んでいく。

「あつ、ドスジャンちゃん」

なぜか、空に咲いた花火は文乃の顔を描いていた。

そして、その下に添えられた小さな花火には、『文乃LOVE』の文字。

「いかにも仁浦市長らしいな」

文乃が『全く……なんて恥ずかしい人！』と怒っている様子が目に浮かぶようだ。

そして、そんな日常こそ俺の緊張を取り払ってくれる。

少し上がる花火が小粒になってきた。

丁度場面の転換、締めに向けての貯めなのだろう。

このタイミングで俺は、聞きたい事を聞くことにした。

「スス子オー！」

「ひゃつ、あ、はいー！」

「貴様の所属、階級は何だ!？」

「サー！水乃月学園A等部1年3組、SS五番隊、電子戦闘担当でありますー！」

急に問いかけられ、SSとしてのスス子として返答するスス子。

いつか、別の世界でも繰り広げたような問答。

確かその時は、周りの事が何も分からなかった状態で必死に情報を集めようとしていたんだった。

けれど、今回知りたいたい事はそこではない。

「そうか！では改めて、貴様は俺の事がどれくらい好きなのだ!？」

「サー！多分この人と一緒にいたら、これからの人生楽しい出来事に事欠かないだろうなー……隣にずっといたいなー位であります!」
スルスルと気持ちを言葉にできるスス子。逆に聞いているこちらの方が恥ずかしくなってくる。

だが良かった。これでうじうじと悩む必要もなくなった。

「そうか！俺がもしこの場で貴様に告白したらどうするつもりだ!？」

「サー！謹んでお受けした後、しかるべきムードにして後は流れに身を任せるつもりであります!」

「そうか！だが今の答えとは関係なしに、俺は告白するつもりだった!」

ひととき大きな花火が上がる。

「那賀、伊波さん……俺と、付き合っただけなだけでしょうか?」

なんのひねりもない、シンプルな告白。

俺には捻った言葉など思い浮かばなかったから、これでいい。

ありったけの気持ちをこめて叩き付けたつもりだ。

スス子は、その告白を受けて一瞬呆けていたように見えたが、一連の会話から流れは見えていたようですぐにか細い声で返事を返してきた。

「つ、謹んでお受けする……っす」

ドーーーーー！

ひととき大きな花火が咲いた。

耳を裂くような音が、その勇気を出した返事を上塗りしていく。

二人の間に、少し気まずいような空気が流れたのを互いに察したのか、スス子が赤い顔をしてもう一回言うべきかと悩んでいる所で。

その空気を払拭すべく、俺はスス子の綺麗な顔を両手で包んでそのまま唇を奪った。

舌を使うなんてテクニクは当然持ち合わせてはいない。

唇と唇が触れ合うだけの子供でもできるようなキス。

思えば、俺の方から彼女にキスをするというのは初めてだったかもしれない。

同じ事をスス子も考えていたようで

「淳之介センパイから、キスしてもらったのって初めてな気がします」と感想を漏らした。

「えー、以上を持ちましてレッドチブ協賛の青藍島冬の花火大会を終了とさせていただきます。お帰りの際はお手回り品のお忘れないう十分お気をつけください」

仁浦元知事のアナウンスが入り、ビーチに散らばっていた生徒達が少しずつ出口に近いこちらへと近づいてくる。

俺達は誰かと合流しようかと聞こうとしたところで、スス子に手を握られ一足先に会場を出る事になった。

「アタシ、このまま淳之介センパイの部屋に行きたいっす」

そういつて、こちらを見ずに先導していくスス子。

しかるべきムードにして流れに身を任せるなんて言っていたが、これではムードも流れもへったくれもないのでは？

そう思っていたところに、シユウ君からメッセージが届く。

『チュパちゃん君の面倒は僕が見ておくから、心配するな淳之介。頑張れよ親友!』

シユウ君の気遣いに感謝していると、直後今度は通話が届く。相手は我が妹アサちゃんだ。

「どうした、アサちゃん!? 転んで怪我でもしちゃったか!? 絆創膏か?」
『小学生か私は……じゃなくて、奈々瀬さんと女部田先輩に誘われてさ。文乃も巻き添えで連れて行くから多分明日まで帰らないよ』

どうせ明日は休みなんだし、たまには兄抜きでパーティーと楽しんでくるわこれが本当の兄離れってね。じゃ、兄も楽しんでねー』プツ
いつもの調子で間隙無くしゃべったと思いきや、そのまま電話を切られてしまう。

「アーサーちゃん、転んじやったんすか?」

「いや、今日一日家に帰らない」とプチ家出を宣言されてしまった」

「普通に二次会とかじゃないんすか？ソレ」

「奈々瀬と郁子の所に身を寄せると」

「やっぱり二次会つすよね」

いつもの調子で喋っていると、最近二人でよく来るいつもの分かれ道に着いた。

平時であれば、このままスス子は寮。俺は自宅へとそれぞれ歩き出すのだが今回は違う。

「ここから先の道は慣れて無いだろう？ゆつくり並んで歩かないか」
そう言つてつないだ手はそのままに、スス子の横へと体を落ち着ける。

「なあ、スス子」

「……せめて二人つきりの時は、伊波つて呼ばれたいつす」

「……なあ、伊波」

「はいつす」

「俺達の変な関係は、もしや周りの皆にバレバレだったのか？」

「多分、筒抜けつすよ。恥ずかすうことに」

「そうか」

今更ながらではあるが、気恥ずかしい。

この告白をするために、俺は何人から勇気をもらったことか。

だがしかし、それらの補助があつてこそ今こうして堂々と手をつないで、恋人同士として隣を歩くことができています。

そうやって仲間思いを馳せていると、いつの間にか自宅に到着する。

「お邪魔するつす」

家の鍵を開け、家に伊波を上げる。お手洗いや、洗面所等一通りの案内をしてから二階の自室へと二人して入る。

冷蔵庫に入っていたジュースを二人分部屋に持って行ってから、いつの間にかベッドを陣取つて座っている伊波にふと気になった事を聞く。

「ここが、淳之介センパイのハウスつすね……。」

「ハウスというよりか、俺の部屋だな。が、ここに来て一体何をす
もりなんだ？」

すると、伊波はなんだこいつ今更ここまで来てと言う表情をした
後、ニンマリと笑う。

「恋人同士になった二人がー、お祭りの後に彼氏の家でー、二人つき
りってなったらー、やる事は一つじゃないっすか？」

しかるべきムードも流れも舞台もいつの間にかすべて整っていた
ようだ。

ああ……付き合ってから二年ほどで性行為に至る俺のスケジュー
ルは、今夜脆く崩れ去ってしまうのだろう。

その11 ♥ 抜きゲーみたいな島に住んでる

自室のベッドに、二人の人間が座っている。

告白を終えた、俺と伊波。

少し長かった拗らせ関係も、ようやく終わりを告げた。

これからは、アイツ俺の彼女です！と胸を張って言えるのだ。

しかし、いまだに気恥ずかしい。

この感情は、恋人という慣れない存在に俺がドギマギしているのが原因か。

それとも、隣で物理的に距離をつめてくる俺の恋人が原因か。

それはよく分からない。

が、分からないままにして置いたほうがこの初々しさを楽しめるからいいなと俺は考える事をやめた。

互いの手が重なり合い、寄せ合っている腕や肩もぶつかる。

冷え込んでいた外に比べて、伊波の体はより温かく感じる。

時折どちらかの手が、愛おしそうに相手の手を撫でたり。

或いは、少しだけ体を相手に預けてみたり。

そんな言葉を解さないコミュニケーションが、しばらくの間行われていた。

「淳之介センパイって、童貞なんっすよね？」

「ど、どどど童貞じゃないが!？」

伊波からサラっとなんでもない質問が飛んできたので、思わずそう返してしまう。

その返しに、少し怪訝な顔をする伊波。

「誇り高き心からの童貞って設定はどこにいったんすかね……じゃなく、心の童貞の捨て方ってなんなんすか？」

俺が日ごろから口にしていた、心の童貞。愛の無いセックスでは童貞は失われない理論。

それをかいつまんで説明する。

「心の童貞の捨て方は、愛し合う人と心から通じ合うセックスをすることによって初めて捨てられる」

その説明に納得したような表情をして、伊波はとんでもない発言をする。

「あ、じゃあアタシ処女なんで優しくしてほしいっす」

SSとしての活動上でしていた行為は？或いは先日の教室での俺との行為は？と聞きたい気持ちになつたが理性がソレを咎める。

「ほら、アーサーちゃんが淳之介センパイは処女厨って言ってたんで、そういうことにして……おかないと、つて……」

触れ合っている手から、伊波の震えが伝わってくる。

隣を見ると、伊波は顔を伏せていた。もしかしたら泣いているのかも知れない。

確かに俺は、この島に来た当初処女厨と僭称していた。

そして今、それが俺の恋人を怖がらせているのだろう。

「童貞には」

恋人として、彼女の不安は取り除いてやらねばならない。

「処女が実際にはどういうものなのかがあまり分からない。なんとなく血が出るのかな？位の認識でしかない」

「だから伊波が自分を処女だと言うのなら、俺はその言葉を信じるだけだ。確かめる術がないからな」

心の童貞を騙る男が、実は童貞では無くても。

心の処女を騙る女が、実は処女では無くても。

そうありたいという気持ちがあれば、それでいいのだ。

ハツとしたように伊波がこちらを向く。

少し涙ぐんだ痕が見られるその顔に手を添えて。

再び俺からキスをした。

「んっ、むちゅっ………ん、ふっ………」

啄ばむようなキスをしながら、伊波の髪を丁寧に撫でる。

心配する事は無いぞと慈しむように、安心するように。

最初は肩に力が入っていた伊波だったが、少しずつ少しずつ俺のキスに身を任せるようにリラックスしているように見えた。

少し落ち着いてきたなという段階で、ゆっくりと口の中に舌を入れ

た。

「んむっ、えろ……ちゅっ、んはっ……ちゅぷっ」

いつの日か、伊波がしてきたキスに比べるとたどたどしく慣れていないキスだった。

伊波はその緩慢とした動きに合わせて、ゆったりと舌を絡ませてくる。

ゆったりと流れていく時間の中で、伊波の両手が俺を掻き抱くように両手を回してくる。

このまま二人がとろけて一つになってしまうのではないだろうか、という不安から唇を離れた。

「ぶはあっ、相変わらずキスは下手っぴっすけど」

「今のキスは、すっごい良かったっす」

伊波は頬を赤らめて、そんなことを言った。

そこには先ほどまでの不安そうな表情は見られない。

むしろこれからの情事を期待するような、蕩けた瞳をしていた。

「それで童貞の淳之介センパイは、次に何がしたいっすか？」

「服、脱がせるぞ？」

言うてから、SSの制服に手をかける。

例えば、SSの制服は着たままデキるがコンセプトになっていたの
で、その服をとった姿は初めて見るのだなと思うと少し緊張して来た。

制服の上を脱がし、ロクに胸元を覆ってない謎の白い布も取っ
てく。

途中、脱がせ方が分からない部分は伊波が優しくサポートしてく
れた。

そうして伊波の上半身は一糸纏わぬ姿となった。

「綺麗だ」

思わず言葉が出る。

程よい形に膨らんだ胸と、わずかながらに存在を主張する乳首。

思わず手が伸びてしまった。

柔らかく、ハリがある肌。揉みこんだ指がにゅっとなんと沈んでいく。

「んっ……今はそんなことしてる場合じゃないっすよ」

少しの間、夢中になつてしていると伊波に怒られてしまう。

気を取り直して、スカートを下ろす。

その下に秘部を覆う、最後の砦である下着が姿を現した。

明るい水色の生地で、中央には小さいリボン。腰周りにはフリルがついている下着だった。

「いざ、そんなマジマジ見られると恥ずかしいっすね。ささっと下ろすっす」

そのまま下着を直視している俺を放置して最後の一枚をスルスルと脱ぎ出してしまった。

「つて、なんで靴下は脱がせないんすか!？」

「いくら暖房が効いているとはいえ寒いだろうと思つてな」

半分はそれが理由、もう半分は趣味だ。

靴下を残してすっ裸になった伊波。

改めてそのスタイルの良さに舌を巻く。

自分の身長にコンプレックスを持っている彼女だが、スラつと伸びているからこそ全体的に引き締まって見える。

ただ、その中でも胸や尻といった部位にはしっかりと肉がついていて、それがまた性感を煽る。

伊波一人だけを裸にはさせまいと、俺も服を脱ぐ。

今度は逆に、俺が伊波に体をマジマジと見られる番であった。

そうして互いに（ほぼ）全裸になったところで、再びキスをした。

「んっ、ちゅっ……」

むき出しになった腕から、肩にかけて。

足先から、腰にかけて。

今まであまり触れることのなかった場所を撫で回していく。

「センパイ、ちよつともどかしいんで……早く挿れてほしいっす」

伊波が顔を羞恥に赤らめながら促す。

もう少しその柔らかい肢体に触れていたかったが、そう言われては仕方がない。

その愛撫ともいえぬ触れ合いで十分興奮しきった肉棒を伊波の陰

部にあてがう。

ふと触れたソコは、俺のイチモツを受け入れるのに十分と言えるほど潤っていた。

「伊波、俺の童貞をもらってくれるな？」

「こちらこそ、しっかり処女を奪ってくださいっす」

二人の心におまじないがかかる。

お互いの目をみつめあいながら。

真に童貞ではない者と、真に処女ではない者。

抜きゲーみたいな島に住んでる二人の間で、発生する筈のなかった、純愛ゲーみたいな恋愛をするためのおまじない。

つぷり、と。

秘裂を肉棒が貫いていく。

伊波に一度受け入れられたソレは、抵抗と感じられない優しい締め付けと共に膣奥へ膣奥へと進んでいく。

根元まで入ったかどうかという所で、これ以上は進めないという感触へと変わる。

「……ナカ、全部埋め尽くしてるのが分かるっす」

伊波が手でスリスリとお腹をさする。

「今日、正常位にした理由は分かるか？」

「アタシが、今度スる時は向き合ってスればくって言ったからっすよね？」

「そうだな。ではどうしてその話になったんだったかは？」

「……アタシのトロけ顔を、どっかの誰かが見たいからじゃや——んっ」

この体勢にした理由も分かっているようなので、抽挿を始める。

最初の一擦りで深いストロークを刻むと、伊波の言葉は嬌声によって中断された。

「分かっているなら話は早い。お前のトロけ顔とことん堪能させてもらおう」

その言葉を皮切りに、ずん、ずんと腰を前後させる。

こちらの言葉にムキになったのか、表情を変えまいとする伊波。

しかし、イチモツが膣奥を突く度にその表情が少しずつ崩れていく。
つなぎあつた手からは、ピストンがもたらす快感から必死に逃れようとよじりが伝わってくる。

声も押し殺そうとしているようだが、それも完全ではない

「……………ふっ、……………んっ、……………あっ」

吐息のような、声にならない声が、わずかに開いた唇からこぼれる。いつもは明るく、笑顔を振りまく少女にこんな我慢を強いている。その事実が余計に俺を興奮させる。

その後しばらくピストンを続けていると。

ある時を境に、ずちゅっ、と。

イチモツが擦れる音に少しばかりの変化が生じる。

挿入した時よりも愛液の量が増して、膣内で発生する音が変わったようだ。

まだまだ我慢している伊波もそろそろ、何かきっかけがあれば開放されるのではないか。

そう思い、ギユッと伊波の両手を俺の手とつなぎ合わせた。

そのまま一思いに唇を重ね合わせる。

「んむっ……………れおっ、んちゅっ」

キスをしながら、ぐりっ、ぐりっ、と膣の深いところへとイチモツを擦りつける。

「んふっ!?……………んぶっ、ぶはあっ」

キスをされながらの行為に耐えられなかったのか、伊波が顔を無理やり横に向けてキスを中止した。

呼吸を整えようとしている伊波に、容赦なく追い討ちをかける。

「ちよっ、待っ……………はあ、んっ……………い、いまは本当に、イツ……………ダメっ、」
だんだんと取り繕えなくなってきた表情を隠そうとするも、手は依然俺が繋いだまま。

他に隠す方法もなく、わずかながらに顔を背けるだけでこちらから表情は十分視認できる。

トロンとした瞳。

息も絶え絶えに震える唇。

どちらのものかも分からない唾液がつーつと頬を垂れている。ようやく見たい表情が見れた。

押し殺していたはずの声も、俺の耳までハッキリと届くようになった。

そろそろ限界も近くなってくる。

ピストンのスピードを上げると、先ほどまでしていた湿った音は、パンパンと肉をたたき付ける音に取って代わる。

与えられる快感にあわせてより一層締まる伊波の膣内に、強い射精感を煽られる。

「んあつ、はやつ、すぎうつ、だめつ、アタシつ、もうつ、」

伊波もどうやら限界が近づいてきているようだ。

声を我慢するということすら忘れて快楽に喘いでいる。

自分のイチモツで相手をよがらせているという事実が、更に俺の腰の動きを加速させる。

「まつ、まだはやく、っ!?!んあつ、なるっ……もうつ、イキそつ」

「伊波、俺も、もう——」

二人の絶頂が近づく。

深い口付けを交わしながら、膣奥一番深くへとイチモツを押し付ける。

「んんっ!?!——んん~~~~~~~~っ!?!」

くぐもった声が伊波から漏れる。

急激な膣内の締め付けに、俺はそのまま射精した。

脳が焼けるかのような快感が、長く続く射精の中で襲ってくる。

意識を失わないように繋いだままにしていた手を強く握ると、伊波も同じように強く握り返してくる。

射精の余韻は、三十秒近くも続いた。

脳が酸素を求め、自然とキスをしたままの唇が離れる。

名残惜しさを覚えながら、荒い呼吸を二人で繰り返す。

少しして息が整うと、どちらからともなく触れ合うだけのキスを交わした。

「……なんか、いろいろ恥ずかしいところ全部見られちゃったっすね」

「今日、誰も帰って来ないんっすよね？なら、もう一回入るっすか？」

行為の余韻に浸る俺のイチモツを扱きそう問いかける伊波。

その卑猥な手遣いに、再び野勃起を強いられた。

一度も二度も変わらないと、吹っ切れた伊波を止めることが俺にできはらずもなく。

結局その後四回戦まで行い、終わったのは日が昇るころであった。

……

……

……

「……可愛すぎかッ?」

何の変哲もない朝だ。

と、思ったが起き上がろうとしたときに腕に重みを感じた。

隣には、情事後始末も最低限と言った形で眠っている伊波の姿。

ふと、明け方まで行われていた行為を思い出し興奮してしまうがなんとか抑える。

(その前に、アサちゃんや文乃はもう帰ってきているのか!?)

できることなら、この部屋の惨状だけでも隠蔽したい。

そう思い、隣の伊波を起こすことにする。

「伊波、起きろ!もう昼だぞっ……って昼!」

時計を見ると、既に正午を回っていた。

何の変哲もなかったが、昼だ。

流石に行為が長引きすぎたのだ。

これでは流石に妹達がいつ部屋に踏み込んできてもおかしくない。

「んあーっ、なんっすか……ススはおねむっすよ?」

意識は覚醒しかけている寝ぼけ眼の伊波をおいて、俺は一人でそそくさと片付けに入る。

すると、そこにコンコンと扉をノックする音が響いた。

「わ、悪い！夜更かしして朝勃ちヤバいから入ってこないでくれ！」
「あ、大体分かってるから大丈夫だよ。アサちゃん朝帰りしてから物音がするまで待ってたから。文乃が兄の分と那賀さんの分のご飯作って下で待ってくれてるから、色々準備ができたらいいから降りてきてね」

ノックをしてきたアサちゃんが、朝から待っていたということとは。大体の状況は把握されているのだろう。妹にまで気遣われる兄の立場とは。

ようやく部屋の片付けも終わり、伊波と俺も着替え下へと降りていく。

リビングでは既にアサちゃんと文乃が料理を広げた状態で着席していた。

「おはよう、文乃。アサちゃん」

「おはようございます、淳之介さん。昨日はたくさん体力を消耗されたようでございますので、今朝は食べやすいものを揃えました」

「お、おはようございます。……お邪魔してるっす」

「那賀さんも、積もる話はあるだろうけど、朝ご飯は食べよ？ほら、こっち座って座って」

後ろから恐る恐るついてきた伊波も、アサちゃんに勧められしらずと席に座る。

いくら陽気な伊波でも、流石に朝の橘家ではアウエー感を感じるのだろうか。

「と、とりあえず覚める前に食べようか。いただきます」

そう言つて、黙々と料理に手をつけていく。

……

……

……

「アーサーちゃん。お兄さんをアタシに下さいっす！」

「そりゃダメだね。兄は私を朝から晩までゲーム漬けに集中できるように介護するので忙しいから」

少し気まずい空気を伊波がどうにかしようと、アサちゃんに直談判

をすることがどうやらダメだったようだ。

「つてのは冗談で。私達も昨日の顛末は大体察してるけど、今こうして二人で一緒にいるっていうことは、二人はお付き合いをすることにしたんだよね？」

俺と伊波はうなずいた。

「ん、そっか。ねえ那賀さん。兄は……お兄ちゃんは、変なところはあ
るけど優しく格好良くて、それでもやっぱり抜けてる所もあって将
来困ること絶対あると思うんだ。」

それでも那賀さんは、そんなお兄ちゃんの隣にいてあげられる？お
兄ちゃんを幸せにできる？」

真剣な面持ちで聞いてくるアサちゃん。

その問いに対して同じく真剣に考えていた伊波が口を開く。

「確かに、淳之介先輩は変わつてるところがあつたり……多かつたり
もするっすけど」

何で言い直した。

「でも、そんな所も含めて淳之介先輩を好きになつたから。だから多
分大丈夫っす」

そう答えて朗らかに笑う伊波。

「那賀さんは、そんな兄と一緒にいて幸せになれる？」

「勿論っす！」

今度は即答。

「うん。那賀さん、兄をよろしくお願いします。はい妹面談終わりー、
次末妹の文乃ね」

俺はよろしくされる側だったのか。

「ドスジャン師匠！お兄さんをアタシに下さいっす！」

「だ、ダメにございます!!——し、師匠……?」

「そうっす！淳之介先輩の胃袋を掴んで離さない料理の師匠！ぜひ弟
子にしてほしいっす」

「師匠……弟子……」

「こうしてほしい！なんてことがあつたら、師匠のいうことはいはい

「聞いてちょうつす。だって師匠つすから」

「いうこと……聞いてちょう……」

不穏な言葉を文乃がつぶやいた後、少し黙り込む。
やや時間があいてから

「いうこと、というのは淳之介さんをお休みの日に一日ずうつとひとりじめ……などでもよいのでしょうか？」

なんて事を言い出すんだ文乃は。

「たまーになら大丈夫つすよ！」

「今後とも淳之介さんをよろしくお願いします。お弟子のすつすさん」

「こちらこそお願いするつす、師匠！」

そしてなぜかすべてが丸く収まったようだ。

こうして俺の意思や説明は何一つ介在することなく、無事に家族への紹介が終わってしまった。

今まで三人でとることが多かった橘家の食卓は、料理の修業をしにくる弟子が一人増えて四人で過ごすことが多くなるのだろう。

その騒がしさこそ、家族らしい。

そう思うと、自然と笑顔になるのであった。

俺とアサちゃんの二人しかいなかった家に。

文乃が増えて三人になった。

やがて文乃も本当の家族になり。

そして、今伊波がその中に加わろうとしている。

彼女が、文乃と同じように家族になるのは。

そう遠いことではないのかもしれない。